

---

# 栄光をたたえて      TEP × MURT

鎮西馬敏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

栄光をたたえて

TEP×MURT

### 【Nコード】

N45900

### 【作者名】

鎮西馬敏

### 【あらすじ】

2005年、兵庫県新天市。弱小吹奏楽部・県立新天高校吹奏楽部の新顧問に突如大抜擢されたのは、はたから見ればただの歴史オタク、実際は相当の努力バカ、当吹奏楽部OBの歴史科教諭、ス波劉介<sup>バリユー</sup>だった。

ス波には夢があった。現役時代に果たせなかった、尊敬する顧問の先生を、吹奏楽の甲子園・普門館に連れて行くこと。認めざるを得ない才能・鎬矢辰悦に出会い、昔の自分・古河力オルに出会い、過去の確執を共有する男・千林裕也に再会し……。最初は一方的

な彼のタクトさばきに振りまわれてばかりだった部員たちも、次第に斯波の意志をくみ取り、心に近づき、そうして彼らは斯波の音楽を描き出す奏者となる。

努力することは、強くなること。

天才にはなれなくても、努力の秀才には誰だってなれる。

「才能あるやつらだけが良い演奏をできるわけじゃない。良い演奏をしたいと努力した奴らの音が、本当に人を感動させるんだ」

絶対に越えられない壁があるとは認めたくない。才能や限界の存在を知りながらも、それでも努力の力を信じてがむしゃらに指揮を振る、青臭い壮年シバリユーの描く音楽は、どうなっていくのだろうか。

・・・王道な吹奏楽青春小説ながら、事実上の主人公が熱血な顧問の先生という設定で進んでいく物語。ぜひ、ご一読ください。

## 序曲

カオルの耳に蘇える。

あの時夢見心地に聴いた曲が。

吹きながらとなりで聴いた曲が。

カオルには聞こえた。

胸にしみわたる温かい音が。

静寂を切り裂く鋭い音が。

おとぎ話みたいに愉快で滑稽な音が。

吹雪となって襲いかかる連符の嵐が。

心揺さぶる熱い音が。

カオルは肌を感じた。

その奏者の温もりを。

その奏者の力強さを。

その奏者のユーモアを。

その奏者の厳しさを。

その奏者の情熱を。

カオルはその音を聴くたびに思い出した。

今の自分があるのはその奏者に逢ったからだ。

・  
・  
・

## 序曲

「うおっ、リユーやんじゃないか。どうしたんだい。」

優しい日差しが窓に触れる。満開の桜の花びらで、風がピンク色に輝いている。

駅前にある横丁商店街。今日は全ての店が休みを取る日で、どこもかしこも皆シャッターを下ろして出払ってしまっており、たまに春風が練習中のウグイスの歌声を連れてくるだけの、時間も音も見当たらない、そんなアーケード。そこへ一台の車が止まったのは、まだ太陽が南中していない頃だった。

突然の来客のために注ぐコーヒーに、四十を過ぎた星悦の親しい顔が映った。

いただきます。中肉中背のその男は黙ってコーヒーを飲んだ。

「お前は僕の子どもの学年じゃないから、同じ学校でも全然噂なんか耳にしないから、どうしてるか気にしとったんや。元気そうでなによりや。」

男は一口飲んでカップをおろしながら、ゆっくりと店の中を見回す。外で『楽器店マーキュリー』ののぼりが揺れている。店中がジャズで満たされている。

「壁がだいぶ茶色くなったな。俺、いつからここに來てなかったっけ？」

「かれこれ十七年ぶりやな。確か開店の日に顔出してくれた時以來やと思うわ。」

「いい味が出ている。」

男は立ち上がり、節くれだった荒れた手を、壁に当てた。

「あの頃は、俺、結構大変だったよな。」

男は呟く。

「まあ 確かにいろいろあったけどな。それで、今日はなんや。ほんまは休業日やけど、リユーやんは特別に應對したるわ。楽譜か？それともこれの修理？」

星悦は右手でピストンを動かす真似をして、ニヤリとした。

「ああ　「男も微笑を見せた。「そのことで、今日来たんだった・・ちよつとこれを直してくれないか？主管のへこみがひどいんだけど。」

そう言いながら、男は足元のケースからサビだらけのトランペットを取り出した。

星悦は受け取り、眼を細めて調べながら、男の方を見た。

「・・頑張れば出来ンことはないけど、わざわざこんなオンボロを使うことはないやろ。ペットなら他に持っているンとちゃうん？」

男は笑みを消し、少し真面目な顔をして。

「　あの時のトランペットなんだよ。」

「あの時・・・？」

星悦は眉をひそめて男の顔を眺めていたが、思い当たるところがあつたのか、眼を一瞬大きく開けて、すぐに怪訝そうに、眼を震わせて男を見た。

「まだ持っていたのか？」

「その時の傷だ。」

男は大きく窪んだ主管と、一部折れ曲がつたベルを指差す。

「　ええんか、こんなの直して。思い出したいくないやろうに。」

「イヤ・・。今の自分に至る出発点は、このペットなんだ。今は感謝の気持ちさえ抱いているよ。何も聞かないで、直してくれ。」

「　お前がええんなら、僕は何も文句は言わん。」

星悦は旧友に優しく笑った。男は修理の間、店に飾っている楽器や譜面を眺めたり取ったりしていた。

やがて星悦が。

「　そつや。リユーヤン、うちの子どもがな。」

二階にある店の扉が音を立てた。黒い学生服を着た若い顔が見えた。

「ただいま、父さん。」

「おう、噂をすれば、何とかってヤツやな。」

高校生らしいその子は薄っすらと灼けた顔を、男と父親に向けた。

「・・・こんにちは。      お客さん？」

「せやけど、お前、こん人知らんのか？お前の学校の先生やぞ。斯波先生。」

「あ      その子は慌てて頭を下げた。      「すみません。噂はお聞きしていましたが・・・」

「四六時中ハニワと戯れている変なオッサンとかいうのдар、どうせ。」

「いえ、そんなことは」

「楽器やつてるだろ？」

「え？」

「      トランペットだろ？」

「・・・なんで分かるんですか？」

「俺の口と似てるから。」

男は、狐につままれたような顔をしているその子を見て、悪戯っぽく笑った。

「辰悦、この人は父さんの長い友達で、高校の時新天の吹奏楽でトランペット吹いとったんや。んで、今年からブラバンの顧問になるんや、な？」

男      斯波は軽く頷いて。

「けど、指揮なんて振ったことないから、果たしてできるかどうか。」

「リユーやんなら大丈夫や。」星悦は斯波の背中を叩いた。「辰悦、お前がこれからお世話になる先生や。リユーやん、ご指導の方よりしくな。」

「え・・・？」

今度は斯波が星悦を見た。

「      リユーやん、僕さ、ボーンやる前にちよつとだけペットやつてた時あつたやろ？こいつな、ちっちゃいときオモチャのラッパが

大好きで、小学生になると、ペットやりたい言ウて聞かんくて、しやアないから僕が教えてやってたんや。せやのに中学に入ったら水泳部に入って、でも長続きせんくて途中で止めて、高校になったらブラバンに入る言っていたのに、往生際が悪ウて、一年経ってもよう入ろうとせエへんのや。」

「父さん、先生に余計なこと言わないでよ。」辰悦は少しムキになつて言つた。

斯波は辰悦の顔をまじまじと見た。太くきりつとした眉、高めの鼻、奥に何か光るものがある、大きく、優しい瞳。

星悦の物ではないと、直感した。だが、妙な懐かしさを感じずにはいらなかった。

シンエツ　辰悦・・・鎬矢、辰悦。

「　　ということは、二年生？」

「え？あ、はい。」

「地歴の選択があるだろう。何を取っているの？」

「日本史です。」

「・・・もしかして、二組？」

「はい。」

昨日見た名簿が頭に浮かんだ。そうか、やっぱり星悦の息子だったのか。それにしても、昨日は彼をどんな人物だと考えていたのだろう。テンポ良く、小気味の良い返事。快い。

「それじゃあ、俺が受け持つクラスだ。よろしくな。」

斯波は辰悦に笑いかけ、星悦を見た。

「いい息子さんだな。」

「へ？」星悦はぼかんとした。「　　ああ、それはおおきに。」

そう言つて、星悦は自分と背丈のあまり変わらない辰悦の肩をポンポンと叩いた。

「よかったな。褒めてもらえてよ。」

斯波は星悦の顔を見た。それから、そつと彼の左手に目を移す。

斯波には人や物をじつと見る癖がある。斯波が無口になつて自分



の手に視線を注いでいるのに星悦は気づき、頬に曖昧な笑みを浮かべた。

「ああ 指輪なら、とつくの昔に失くしたわ。」

「・・・そうなのか？」

斯波は顔を上げた。

「女房が事故で死んだのも十二年も前の話、七回忌まではやったはずやけど、それから記憶にない。女房も、もう自分のことは忘れてくれって、冥土で言っているに違いないわ。」

まるで他人事のように星悦は語る。「事故」という言葉に、辰悦の体がビクンと脈を打った。

「そうか・・・」

全く、妙なことを考えるヤツだな、俺は。それじゃあ、この子は母親似なのだろう。

だが・・・心の虫はなおも斯波の疑念をつつつく。

自分の子なら、これほどまでによそよそしいだろうか。

表面には出さずに。

「・・・ごめんな、変なこと訊いてしまつて。本当に、すまん。」

「ええて。」星悦は、からからと笑った。「リユーヤンとはもう十七年も会ってへんから、この子が生まれたのも家内のことも知らないのじゃあないで。・・・全く、そんな青菜みたいな顔せんと。塩かけたるか？」

「ありがとう。」斯波の顔が緩んだ。「星悦はいつになっても優しいな。」

無邪気な星悦の笑みの後には、手がくたびれた薄黒いティディベアが、ちょこんと座っていた。

「どうもありがとう。おかげで見違えるほど綺麗になったよ。」

星悦から手渡されたトランペットは、磨かれて再び銀色の輝きを取り戻していた。

「そう言うてもらうとうれしいわ。また楽器壊した時は、いつでも

直したるで。」

「人聞きの悪い。」

星悦と辰悦は店の外まで斯波を見送りに出た。斯波は、何か光るものを秘めた辰悦の目をもう一度よく見た。

この目。思い当たる者もないわけではないのだが。

「・・・県新で、会うのを楽しみにしてるよ。」

「はい。」辰悦はうなずいた。

すると、星悦が思い出したかのように。

「ケンイチには、もう会ったんか？」

「ケンイチ　　？ああ、兼吉。あいつ、またここに戻ってきたのか？」

「おう。しばらく元町で店開いとったんやけど、やっぱこつちがええ言うて、五年前にこの商店街に移ったんや。ほら、あそこの店。今日は休みやけどな。」

『中華亭　こつつあんです』。赤地の暖簾に書かれた金色の文字が揺れている。

「なかなか旨いんや。暇な時でええから、寄ってやってくれ。」

それから斯波の耳元で囁く。

「あいつ、お前との約束、まだ覚えてんねん。それで今一人息子をシゴいとる。」

斯波は顔を遠ざけ、不意を突かれたような顔をした。それを見て星悦はニヤリとし、斯波の背中を車の方へ押した。

よく笑うヤツだな。相変わらず。

斯波は苦笑いをにじませた。

「それじゃあ、また。」

「おう、じゃあな、リユーちゃん！」

車は商店街を後にした。出口の桜がきらめいていた。

新天横丁の駅前を過ぎれば、曲がりくねった『蛇の背坂』に至る。その坂を上りきれば、学院大学まで春なら見事な桜並木が見られる。地元の人はこちらを『学園花通り』と呼んでいる。その通りに沿って

左側にあるのが、県立新天高校だった。

（女房のことも、もう忘れてしまったわ。）

平然と語る星悦の顔が眼前によみがえる。

そんな簡単に、忘れられるものだろうか。

辰悦の顔が浮かんだ。

・・・・・・

息子、か。

斯波は左手を顔に寄せ、その薬指にはまった、磨かれて光を放つ指輪をしばしの間見つめた。そして、しっかりと刻まれたその名に、そつと唇を合わせた。

## 第一楽章 宝島 (1) (前書き)

今後、すべての章のタイトルには、その章で中心となる吹奏楽曲の曲名をつけていくことにします。

第一楽章はT・S・QUAREの「宝島」。吹奏楽経験者なら一度は聴いたことはあるかと思います。シバリューなりの青臭いこの曲の解釈についていただければと思います。

## 第一楽章 宝島（1）

### 第一楽章 宝島

1

よく晴れたものだ。大空を泳ぐ鯉が本当に気持ちよさそうだ。憩いの森もロータリーの植込みの木々も、青葉の枝を大きく広げている。高校の敷地は鮮やかな緑で顔を染めて笑っている。

大型連休が明けても、教室からも職員室からもまどろんだ雰囲気は消え去らず、昼休みの職員室では、教諭たちが土産話に花を咲かせていた。

久しぶりに実家に帰ってくつろいだ話。慰労の為に温泉に行ったはずが、行き帰りで大渋滞に巻き込まれ、目的地でも賑やかな連中が風呂を占拠していて余計に疲れた話。東京に行った、四国に行った、話の内容は十人十色。

しかし、そんな話題もどこ吹く風で、参考書と石器で埋もれた机に向かつて、黙々と一人遊びをしている教諭がいた。壁にもたれて談笑していた大西は彼に目が止まり、話していた田岡にそっと耳打ちをした。

「ねえ、先生      斯波先生、さっきからずーっと静かになんかしてはりますけど？」

大西の言葉に、田岡はさしたる反応は示さずに。

「あー斯波先生なら、またどっかの博物館でハニワ買いはったそうですね。」

大西先生は目を丸くした。

「ハニワ。また？てか斯波先生って買わはらへんでもハニワ、よく持ってはりますやん。」

「あー、『たける君と仲間たち』やろ。今度のはデイチーらしいて。

「デイチー。」

二人は、花輪を巻いたハニワを頬擦りする斯波の姿を、しばし眺めた。

「それよりも大西先生。」田岡は声を潜めて言った。

「斯波先生、今年から吹奏楽の顧問になりはったやろ？まあ、うちの吹奏楽は、こんな言ったらアレやけど、存在価値の見当たらん部活やし、離任された小林先生もそないにやる気のあらへんヒトやったけどな、ちよつと斯波先生には務まらん気がするんや。いや、生徒がどうのこうのって話じゃない。なんつうか　はつきり言ウて、斯波先生

あまりにも変人すぎんか。」

「いや先生、それは言いすぎですわ。・・まあ、確かに斯波先生はここに来てまだ二年ですから、この学校に慣れてはらんかもしれませんが、でも先生、去年三年の日本史の個別指導して、第一志望に合格させたやありませんか。ミテクレは変かもしれませんが、技量はほんまもんやと私は思いますけど。」

自分の意見に同意が得られなかったためか、田岡は顔をしかめた。

「でも、それはそれ、これはこれですよ。吹奏楽の顧問はハニワと遊んどいていいだけやないんです。生徒一人ひとりの技術を高めるサポートをせんとあかんし、コンクールでは指揮も振らんとあかんのですよ。吹奏楽の生徒の中にも、例えば古河とか、真面目に頑張ろうとしている子もいるんです。経験の薄い教師が顧問になったら、そんな子はやる気をなくしてしまうんとちゃいますか？」

大西は、肩にかかった髪を優しくかき上げ、やわらかな笑みを浮かべた。

「顧問になりはって一ヶ月たちましたが、何の問題もないようですから、生徒にも結構ウケがええんとちゃいますか？それに、聞いた話では、斯波先生　あの永岡先生の教え子らしいですよ。」

田岡の動作が一瞬止まった。目を見張る。

「永岡先生で・・・あの、永岡先生？」

「ほかに誰がいいます？」

大西は声爽やかに田岡に尋ねた。

田岡は押し黙って、もう一度、何気なく斯波の方に目をやった。

斯波はニタニタしながら、自作の土俵でたけるとデイチーに相撲を取らせていた。

五月晴れの日には、外に出て弁当箱を開くのがいい。そう思っていると、ほら、真つ白な講堂の外に生徒が集まってきた。

彼らはここ県立新天高校の吹奏楽部員だ。

最初にコンクリートの講堂前の地面に腰を下ろしたのは、爽やかな笑顔が印象的な細身の男子と、肩をすくめて背筋の曲がり、やたらと周りを見回す男子の二人組だった。

「それでさあ・・・」肩をすくめた男子は座り切る前に話の続きをし始めた。爽快な男子は彼の話に熱心に耳を傾けている。

「今年のコンクールの代表校の予想ですよね？」

「そうですね。」肩身の狭い男子は顎をゆっくり前に突き出した。頷いたらしい。

「問題は、関西代表なんでえ。」

「どうしてなんですか？」

「だってほら、コンクールにはさ、三回全国に出たら次の年は出られないっていう決まりがあるでしょ。そのせいで今年は清流が出れないから、関西代表の席が一つ空くわけ。」

「西原商業と、九重南と、あと一つってことですか？」

「そうですね。」肩をすくめた男子は顎を突き出した。「兵庫は強豪が多いからな。明石第一だとか、県立衣笠釜とかがそこに入るかもしれない。でも大阪の涼泉や京都の御所ヶ原も外せないし、この四校が横並びとなると、いよいよどこが行くのか分からないねええ。」

いずれ話さねばならないので、ここで一旦休憩して、吹奏楽のコンクールについて話をしようと思う。

まず、吹奏楽コンクールのスタートは地区大会だ。その上に県大会、地方大会と続き、頂点が東京の普門館で行われる全国大会だ。地区は七月の末にあり、県は八月上旬、地方は下旬、そして全国は十月に開催される。

次に表彰の仕方だ。まず、プログラムの全団体の演奏が終了すると、A、B、C、Dで評価された各団体の審査の集計がなされ、その後審査発表が行われる。発表では全て団体に「金賞」「銀賞」「銅賞」が贈られる。だから、「銅賞」といっても、決して三位という意味ではないのだ。そして、全団体の表彰が済み、それぞれが三賞のどれかを受賞したところで、次の大会の代表校が発表される。この代表は「金賞」受賞団体から選ばれる。つまり、「金賞」を取っても代表になれるとは限らないのだ。少しややこしいかもしれない。ここで惜しくも代表から漏れてしまった「金賞」のことを、俗に「カラ金」とか「ダメ金」とか言ったりする。

県立新天高校の場合は、最初が西阪神地区大会、次に兵庫県大会、関西大会、全国大会へと駒を進めていくことになる。

背が曲がり肩をすくめた男子が熱心に今年のコンクールの代表校の前評判を話していると、四人の女子がその横に座り込んだ。

「オリさん、またコンクールの話してんの？飽きへんなあ。あ、おっす、リツちゃん！」

「こんにちは。」横川律人は爽やかな笑顔で、おさげ髪の子に会釈をした。

そのおさげ髪の子の横の女子は、オリさん 織田光慈の話に興



味を抱いたようだ。

「清流が出ないって、本当？」

「ほらカオル、こんな奴相手にしちゃダメやって。こいつの頭はブラバンでぎっしりなんやから。」

「いわゆる、ブラバンオタクさあ。」

その横の女子が弁当箱を開きながら、からからと笑った。眉毛の曲がり具合が絶妙だ。

おさげは続ける。

「この前も今年の課題曲の話ずーっと聞かされてさあ。ほら、何やっただけ、パ　なんかかっていうの、ほら、あれ。」

オリさんは、もじもじしながら。

「『パクス・ローマ』だよあ。」

「あーそれ世界史で今日習った！『ローマの平和』でしょあ？」

垂れ眉の女子は、箸を片手にキャッキヤとはしゃいだ。

「そう、そのパクス何とかが、ローマ帝国の軍隊をテーマにしたもののこのうって、問わず語りで延々と聞かされて。正直ウンザリしたわ。」

「・・・聞かしたんじゃあ、ないよあ、あれはあ　　独り言だもの。」

弱々しい声に少し抑揚をつけて、オリさんは言った。強く言い返したつもりのようだ。

「独りで課題曲のことぶつぶつ口にしてるのも、結構問題よね。」

髪を頭のでっぺんで団子に結んだ女子が、エビフライを箸で摘みながらさり気なく口にした。逆三角に縁取られたレンズが光る。

「さすがコード、なかなか言いますねえ。」

おさげはおむすび片手に満足そうに笑った。

「清流が出ないって、本当？」

おさげの横の子がまた訊いた。

オリさんはもじもじしながら。

「・・・ええ、そうですよ。」

「そうなんだ……」

その子は小さく溜め息をついた。

「……でも、あの学校はマーチングにもお、取り組んでいるし、コンサートもたくさん開いているから、暇になることはあ、ないんじゃないかな。」

かばうようにオリさんが言った。

空に、一直線のヒコキ雲が流れている。おさげはそれを見上げて、やりきれない笑みを浮かべた。

「ま、コンクールのこといくら話したって、ウチらには関係ないよ。どーせ今年も銅賞だし……」

「曜子ちゃん。」

垂れ眉は急いで口を挟み、おさげにだけ聞こえる声で、カオルと呟いた。

「あ　「おさげは顔色を変えて、垂れ眉と反対側の自分の横に座るその子を見た。」

「ごめん……カオル。」

「いいよ、そんな。もう忘れたし。」

カオルはせわしく手を横に振った。複雑な笑みを浮かべながら。

カオルは、二年前の春、私立の清流学院高校を受験した。進学校であるだけでなく、部活動も盛んで、バレー部を始めとして運動部は近畿大会の常連であり、吹奏楽は全国経験もある強豪校だ。これほどの好条件が整い、しかもカオルにとって手が届かない学校ではなかった。

だが、カオルは落ちた。新天高校に入学後届いた成績通知。一点差で散った夢。

なにやってるんやろ、わたし。

この前、曜子の誘いで清流学院の定期演奏会に行った。立ち見が出るほどの大盛況。ステージに立ち並ぶ部員のオーラ。指揮棒が振り下ろされた瞬間、多彩に、壮大に繰り広げられる音の祭典。

・・マジ、ヤバイ。

曜子の感じた震えは、カオルにも伝わってきた。繊細なフォルテ、重厚なピアノ。今の自分には到底真似できない、巧みな表現力。

その中で特に光っていたのは、哀愁と滑稽さを見事に吹き分けた、アルト・サクスのソロ。その透き通った音色に、二人はあつという間に吸い込まれた。

七色サククス。曜子が呟いた言葉。

今もカオルの目の前に鮮明に映し出される。そして必ずそれについて来る思い。

なにやってるんやろ、わたし。

カオルの気を察したかのように、おさげの曜子がため息をつきながら言った。

「でも、ほんまに上手かったなあ、七色サククスの『愛を奏でて』。」

「七色つて、なんですか？」律人が尋ねる。

「清流の定演でソロ吹いてたサククスの男子のこと。」

「あ、それ、千林君やろ？あの人ウチらと同じ年らしいで！」垂れ眉が話に加わる。

「うそお！プロ級に上手いで、あの人！」曜子が目を丸くする。

「千林　ああ、確か清流の顧問の実の息子ですよね。」オリさんも続く。

「めっちゃイケメンさあ。」垂れ眉の未来はうつとり目じりが垂れている。

「まあ・・・」三角縁の和音はあくまでマイペースだ。「確かに、こここのブラバンは清流の比になるはずもないし、カオルが失望するのも仕方のないことよね。」茶に口を添える。

「おいおい部長が言っちゃああ・・・。」オリさんはもじもじしながら。

「コードの言う通りさあ。」未来が手を高く上げて和音に賛同した。

「部員少なくて楽器そろわないし、練習場所の講堂は暑いし寒いし

苦情来るし、おまけに

顧問は・・・」

「そう、それ！」曜子が未来に向かって指を差した。「だいたいシバリユーってさあ、」まあ面白くて授業も楽しいし生徒のことよく分かってくれるけど、と早口で付け加えて、

「吹奏楽の指導能力、ないでショ？」

「確かに、小林先生と交代してから今まで、一度も顔を出さずにただ基礎練やれって言うだけで、まだコンクール課題曲も何も配っていませんからね。」律人が苦笑いした。

「シバリユーは今までハニワばっか相手しとったから指導の仕方分からのしやあないけど、副顧問のカイリユーは前からいるんやから、なんかすりやええのに！」

「何や、ポケモンみたいやね。」未来が笑う。

「貝原先生は、小林先生がいたときからずっと事務の仕事ばかりやらされていたから。」

和音は静かに茶をすする。

「はあー」未来はおおげさに肩を落とす。

「先生がやる気ないんやもん、今年もどうせコンクール無理さあ。出場料の無駄やって。それ使わないで毎年貯めていったら、新しい楽器一本ぐらい買えるんじゃない？」

「そんなこと言っちゃあ・・・」オリさんはもじもじしながら。「小林先生は、コンクールは賞じゃない、出ることにイ、意義があるんだってえ、言っていたしい・・・」

「意義。何が意義？大会出ても何一つ得るものなんてあらへんやん。」

曜子が口を尖らす。

「そうね。あえて言うのなら、劣等感、あきらめ、仲間割れ・・・」

和音が指折り数えていると、駐車場のほうから内股で走ってくる化粧女が見えた。とたんに曜子と未来の顔が渋る。

「来た来た、ペンキ女・・・」

「超バッドタイミングさあ。」

ペンキ女、と密かに名づけられた女子は、五段の石段をへ口へ口になって昇り、アクセサリーを山ほどぶら下げた黒いカバンをジャラジャラ揺らしながら、和音と未来の間にヘナヘナと座り込んだ。

「ぐあゝ、すーがくの小さすとはんま疲れた、あ！」

語尾をやけに強調する口ぶりがヒジョーに特徴的で、聞く側の癪に障る。

「ねえ聞いてヨオ未来ちゃ、ん！」

「はいはいはいはい、一体何さあ？」

未来が眉間にしわを寄せても、相手は全く彼女の嫌悪感に気がつかない。アクセサリー好きの女子は、マスカラを塗って大きくなった瞳を、嬉しそうに輝かして。

「璃紗すーがくほんまあかんワア！いや、マジで！五問中三問以上正解で合格の小テストさあ、十回も0点とったんやから！そしたらニシダが、西園寺、お前はもうべんとくっていいぞ、っていつてくれてえん。すこくなくくない？璃紗0点しかとってへんのに補充めけだせてんで、え！」

さも自慢げに彼女は語る。

「十回も課題作った西田先生の方がすごいわ。」

曜子はよく通る声ではつきりそう言った。とたんにアクセサリー好きのネコ目が曜子をギロリと捕らえる。

「トダさんにはしゃべってへんわ！かって話にはいつてこんといてや。マジキモイ、イ！」

「『キモイ』なんちゆう言葉はな、自分の顔見てから言うもんやで。」

曜子は何のダメージも受けず挑戦的な笑みを浮かべて言った。

ネコ目は意外と気が弱い。言い返せないくらいの傷を負い、スグに丸くなって、優しいかわい後輩に援軍を求めた。

「ねエリツちゃあん、なんかいいかえしてよう！璃紗なんもわるいこといつてないのにイ、なにあいつウ、ほんまムカツクウ！」

「まあ、まあ・・・気にしないことですよ。」

ハハッ、と律人は愛想よく笑い、曜子にも恐る恐る会釈して、公平な立場を表明した。

「ところで」元気は？和音がオリさんに問いかけた。オリさんはスパゲティをずるつと吸い上げて、モゴモゴしながら言った。

「さあ・・・今日は見てないですがねえ。彼もまたあ呼び出しなんじゃあ、ないですかね。」

ふう。和音の紅茶に波紋が広がる。

「最近よく野球部の練習に混じっているのを見かけるの。バカな考え巡らせていなきやいいんだけど・・・。」

「あのさあ。」璃紗が見ていた鏡を閉じて言った。

「こんどから、璃紗たちのこもんかわったんでしょお？だれだったっけ？」

「え？」カオルは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに腑に落ちて、答えた。

「ああ　斯波先生？」

「グエーッ、シバリューなん？ウソォン！璃紗にほんしの小テストの補充まだいってないのにイ・・・」

この世も終わりのようだ。彼女にとっては。

「お前そっついや、四月からクラブ来てなかったもんな。」と曜子。

「あ、そうそう先輩、斯波先生って、県新吹奏楽部のOBらしいですよ。」

「えっ？」

今度は曜子と未来とカオルの三人が目を見開いた。

「あ　そんなこと聞いたことあるわ。」和音は最後に残した玉子焼きを食べる。

「どういうことどういうこと、それ？」

「なんか、鎚矢さんに聞いたんですけど、昔、永岡先生って、吹奏楽界で名を馳せたすごく偉大な先生が県新のブラバンの顧問してた時があつたらしいんですけど、それで県新が初めて全国に行っ

た時、鎬矢さんと斯波先生、二年生だったそうですよ。」

「ええっ、ジャズのおっさんが？シバリューと同級生？」と曜子。

「リッチちゃん、斯波先生って何の楽器吹いていたの？」とカオル。

「トランペットだそうです。」

「ねえ・・・」

「全国ってさ、普門館やる？すげえシバリュー！」

「普門館のステージってさあ、黒光りして自分の顔が映るんやろう？」未来は興奮して。

「永岡先生で、今どこにいるの？」とカオル。

「ねえ・・・」

「ええと、確か神戸の方の学校に飛ばされてえ、何年も前にい定年したらしいですよ。」

「青海高校ね。それと、清流学院の千林先生は、斯波先生と同期の部員だそうよ。」と和音。

「青海って、昔は全国の常連校だったところじゃなかった？」とカオル。

「うわあ、すげえ、じゃあさ、今年はさ、永岡先生の教え子対決が見られるってことやな。んー、なんかウチ、わくわくしてき」

「んもお、きいてよオ！璃紗怒るよッ。それでさあ、シバリューってエじゅぎょうとかきびしいから、やつぱりれんしゅうとかキツくなるんかなあ？やったら璃紗、バイト出来なくなるからめっちゃこまるウ！クラブやめんといかんくなるわあ。どうしよう？」

「えーやんえーやん、あんたがクラブ辞めたら、クラブもつと楽しくなるし。決定はお早めにな。」曜子は嬉しそうだ。

「うるさいッ」璃紗はふくれっ面をして怒鳴った。

ちょうどその時、威勢のいい、よく通る声がかオル達の後ろからした。

「オーッス！」

未来が振り向いて、

「あ、元気君！」

「久しぶりやなあ、浜岡。どないしたん？」

「お、知りたいか知りたいか？俺な、今まで野球部の整備手伝ってん。今野球部の体験入部やつとんねんけど、俺さ、動きがいいって先輩に褒められてん。入ればレギュラーも間違いなしかもな、ハハッ」

「え、ってか浜岡って、運動神経良かったんやね。文化部やのに。」

嫌味を嫌味と感じない璃紗は、ソーセージを食べながら平凡な声で感想を述べた。

「すごいですねえ、先輩。」律人が爽やかに言った。そのせいで元気はますます図に乗って、

「やる？見てろよお前ら、夏には県新野球部のエースになって甲子園からテレビ越しにみんなに手エ振ってやるからよ！」

「エースって、浜岡君ピッチャーなん？」

「ほっとき未来、自己陶醉、自己陶醉。」

曜子は垂れ眉の下の目を真珠のように輝かせる未来をなだめた。

「元気。」和音が普段より大きな声で口を挟んだ。思わず元気の姿勢が改まる。

「本当に野球部入る気なの？聞いた話だと、野球部って運動部の中でも一番練習が厳しいらしいよ。」

「心配はいいですよ、部長。」元気はおどけて答えた。「俺は好きなことは多少しんどくても手を抜かずに地道に努力するタチなんです。」曜子たちの方に向き直って。「お前らも、俺をバカにするのも今のうちだけやぞ。すぐにでも甲子園で俺がバットを振る姿が見られるようになったらさ！」

「それって、三振ばっか、てこと？」

とたんに元気の甘栗頭が焼き栗みたいに赤くなった。

「ちげーよ！そー人のことバカにすんのいい加減にしるよ、戸田！」

元気はそう言って、ふとロータリーの横の時計を見た。



「みんなもそろそろ急がんと、五時間目間に合わんようになるで。んじゃ、ブラバンのみなさん、お達者でえ。俺は今日から野球人だア！」

元気はちらりとカオルの方を見て、ニツ、と浅黒い顔に満面の笑みを浮かべた。カオルは思わず目をそらした。頬が少し赤らむのが分かった。

「ちよつと、なんなら退部届は？」和音が叫ぶ。

「さつき置いときました。」

「どこに？」

「貝原先生の机の上。」

和音が顔色を変えて口を開いたのを、元気が出鼻をくじいて。

「後始末は宜しく願います。んじゃさよなら！」

足音に比例して後ろ姿がだんだん小さくなっていく。

和音は立ち上がった。

「私　ちよつと音楽準備室行ってくる。みんなはもう戻っていいから。」

曜子が眉をひそめる。

「え？コード、どうする気？何したって無駄やつて。」

「でも、退部届だけは先生来る前に取り戻してくる！元気のお父さんにバレたら、厄介なことになるでしょう？」

そう言つて、和音は弁当箱を片手に、足早に講堂の横にある音楽棟に消えていった。

璃紗は立ち上がり、んーと両手を伸ばしてのびをした。他の人もつづいて弁当を片付け、歩き出す。

「浜岡先輩がいなくなったら、チューバどうするんでしょうね。」

ひよっこりと律人が後から顔を出すと、曜子はさあねとだけ言つた。

「オリさん、浜岡の担任　誰やったっけ？」

「世界史の田岡先生ですわ。田岡先生、浜岡君とこのラーメン、大好物ですからねえ。浜岡君が野球部に転部したことが田岡先生に知

れたら、すぐに浜岡君のお父さんの耳に入りますねえ。」オリさんは肩をすくめた。

「でもさあ、元氣君が野球やったら絶対かっこいいさあ！甲子園もなんかもうお隣さんみたいに近くなった感じやね。」

未来の真珠の輝きは璃紗にも伝染する。

「まあ浜岡はべつにきょうみないけど、でも野球部が甲子園いつたらブラバンでおうえんいけるから、ヤッパリがんばってクラブつづけちゃおうかな、あ？守口先輩が間近で見られるチャンスかもしれないし。ああ、最高 ん！」

「のんきやね、あんたらは。」曜子は呆れて後を振り返った。

その直後、予鈴が鳴り、生徒達は慌ててロータリーを回り、校舎へ走っていったのであった。

石畳に映るソテツの影が、少し傾いた。玄関から稚魚の大群のように出てきた生徒のも今はまばらとなり、目の前の白い講堂から、ブーだのピーだのペッポーだの、不規則な音楽が飛んでくる。ブラバンが音出しを始めたのだ。

CDを再生させる。換気扇が回り、ライターの火が光り、シューッと白い煙が勢いよく流れては消える。斯波の耳には、在学の時と変わらないかまびすしい音の応酬が飛び込み、

瞳には、昔のままでいてくれた白い講堂があった。

長いこと止めていた煙の味が、最近むやみに欲しくなる。胸の奥からムズムズと、何かが這って出ようとする感触に襲われると、昔はいつもタバコを手にしたものだ。ただしそんな時は、斯波はいつも指に大事にはめている指輪を、静かに外すのであった。

扉が開く。大柄な男性が入ってくる。眼鏡の奥の冴えた瞳は、楽

しいのかも怒っているのかも、なんの感情の機微も示さない。斯波はこの瞳に見られるとつい喫煙に集中して、吸い過ぎてよくむせるのだが、今日の男の瞳は、どこか柔らかな感じがした。

「あ、すみません。勝手にCD借りてます。」

「どうぞどうぞ、おかまいなく」

男は静かにプレイヤーに耳を澄ませる。

「『五月の風』。九七年の吹奏楽コンクールの課題曲ですね。

これは　そうか、青海高校最後の普門館での演奏。指揮は永岡憲吾氏。氏の最後の指揮でもありますよね。」

斯波は男を見た。

「当たり前です。よく聴かれるのですか？」

「ええ、まあ。前任の小林先生が永岡氏指揮の演奏のCDをよくお聴きになりました、それで自然と演奏曲に関する事柄が私の記憶の中にも入ってきました」

題名にふさわしく、颯爽と駆け抜けるような伴奏に、メロディーの木管が軽やかに乗っかって、新緑の朝を優しく描く。

朝、か。

オレンジ色に映える灰皿に、タバコを押し付ける。

夕焼け空には、合わないよな。

それでもCDは止めない。

「　貝原先生、そろそろ、話して頂いてもいいのでは？」

「何のことです」

「おれ　いや、僕を、地歴公民科で音楽とは無縁の男を、どうして吹奏楽部顧問に推薦なんか、されたのですか？」

男　　貝原の目元と口元が緩む。

転調して、トリオが始まる。クラリネット単独の親しみあるメロディー。

「いえ、そんな大したことじゃないです。先生は突出した素敵なユーモアをお持ちの方ですから、そんな面白い人が作る音楽ってどんなのかなあ、って思っただけですよ」

「今の僕が作る音楽なんて、大したものじゃないですけどね。」  
斯波はタバコを取り出しかけて、すぐに戻した。

「でも、正直、吹奏楽部の顧問になれるなんて夢にも思ったことがないんで、すごく嬉しいです。」

貝原は黙ったまま、机に向かい、パソコンの電源を入れた。

「そんなことおっしゃって」

貝原の口元がかすかに緩んだ。・笑った？

「・・・はい？」

「先生、実は音楽と近い関係なんでしょう？」

課題曲が終わり、自由曲に移る。

どこことなく不吉な響きが、勢いよくクレッシェンドされる。

トランペットのファンファーレが高らかに鳴り響く。

斯波の顔が思わず歪んだ。

レスピーギ作曲『ローマの祭り』より、第一曲・チルチエンス、第四曲、主顕祭。吹奏楽コンクールでは定番の曲目だ。そして斯波にとっては

「え・・・」

「音大に通っていらした頃から、顧問になることだけを考えて生きてきたらしいですね。ある人から聞きました。」

トランペットのファンファーレと、盛り上がっていく短調の重奏。

換気扇から、もくもくと白い煙が一続きに流れていく。

「どうして、そんなこと」

貝原の瞳から真意が読み取れない。一気に吸い込まれそうになる。

危ない。

とりあえず、急いで時計に目をやった。

「あ、すみません、申し遅れました。」

斯波は咳き込みながら話を切り出す。

「何をですか？」

「僕、今日用事がありました。申し訳ありませんけど、戸締りよろしく願います。あと、白鳥にこれのコピー頼んでおいて下さい」  
膨らんだ茶封筒を差し出す。

「明日は午前中を使ってその合奏をすると伝えておいて頂けますか。」

「しかし、土日に部活動をすればこの部の保護者会が黙っておりませんよ」

斯波は思わず笑みをこぼした。

「それを片付けるのが先生のお役目でしょう私は素材調べのために時間が必要なんです。それでは。」

貝原に話す隙を与えないまま、斯波は逃げるように準備室を去った。

後に残された貝原は、やれやれと疲れた顔をしたが、何かを思い出してか、にんまりと静かな笑みを顔に広げた。

鍵を開け、銀色の愛車に乗り込む。

車内の空気は、いささか淀んでいた。窓を開け、MDをまわす。

エンジン音とともに、トランペットの銀色の音が響く。

ウィナーズ 吹奏楽のための行進曲

無伴奏の中光るソロトランペットが、ホルンやオーボエを引き連れ、やがてクラリネットの優しい、コーラルのようなメロディーに落ち着く。

二〇〇三年、吹奏楽コンクール課題曲、第一番。今から二年前のことだ。

東京の普門館に響き渡る、黄色い音、純白の音、淡い音、太い音。

トランペットのファンファーレが、次第に熱くなってくるメロディーの後で、弱く、しかし存在感をはっきり示しながら、トロンボ

ーンによる最初のメロディーを導き出す。

斯波は万華鏡のように表情を変える音楽に聞き入りながら、しかし、両手はぎゅっと、ハンドルを余計なほど強く握りしめていた。

先生、実は音楽と近い関係なんでしょう？

俺が音大を卒業したこと、あの先生、知っていた。

斯波は自分の手が煙草の入ったポケットに伸びていることに気づき、急いで引っ込める。

貝原先生。

あの人、昔の俺のこと、知っている？

「ある人」って、一体誰なんだ？

俺が音大入ったこと知っているのって、星悦と、兼壺と　あと二人。

一人は、俺が過去を忘れることを望み、陰で俺を嘲笑う、千林裕也。

もうひとり、俺を過去にいつまでも執着させる、あの日以来ウツツから跡形もなく消え去った、恋人にして最愛の妻・玲子。

俺はかつて、この二人の姿が脳裏をよぎるたび、気が狂いそうになったものだが、いつの間にかその影は薄れ、今の今まですっかり忘れていた。それが、あの曲を聴いたとたん、全てがよみがえり、俺に突然襲いかかってきた。

曲が最高潮を過ぎ、バンド全員で奏でた重厚な響きが、再び、ただ一本のトランペット、そこに回帰していく。

突然よみがえる金管のファンファーレ。終止符の前、低音のベーの音が曲を締めくくる。

千林。俺はあいつを今でも許せないのだろうか。

玲子。俺はまだ許されないのだろうか。

俺はまだ、過去から離れられないまま、今に至っている。

永岡先生。やっぱ俺、吹奏楽に戻ってこなかった方がよかったのでしょうか。

リピート再生で、ソロトランペットが再び響きだした時、開け放っ

た窓から全く同じ旋律が飛び込んできた。

ステレオだ。

斯波は思わず車線から外れ、広くなった場所に車を止めた。車は衣笠釜市との境、嫁川まで来ていた。

MDを止め、河川敷から響くトランペットの音源を探す。

いた。橋梁の柱に寄り添うように立つ、学生服姿の男。斯波はあつと声を漏らした。

あの子は、星悦の店にいた　　そうだ、確か、鎗矢辰悦という名前の。

辰悦は離れた車道にいる斯波の存在に気づかずに、クラリネットの旋律を軟らかく奏でる。斯波は車の横にたたずんだまま、包み込むような音色に聞きほれていた。

辰悦は自分の音確かめるように目を閉じて、ウィナーズのメロディーを独奏し続ける。

・・・。

きつと、優しい性格なんだろうな。星悦によく似て、周りを和ませ、心地よくさせる雰囲気、彼もまた備え持っているのだろう。

斯波は思わず身震いがした。

生まれながらのトランペッターって、こんな奴のことを言うんだ。なんだか、すごく、快い。

俺、やっぱり音楽が好きなんだ。それでも、吹奏楽が好きなんだ。

・・・永岡先生。俺

一曲を吹き終わり、辰悦はふと車道の方を見上げた。

銀色の車が一台、沈み行く夕日を浴びて、松明のように川面を照らして川縁を走り去り、消えていった。

静かなところへ行きたい。

川辺は闇に包まれようとしていた。

静かなところへ行つて、あの音を再生したい。

斯波はハンドルを握り、ただそれだけを考えていた。

嫁川の河口辺りまで来て、斯波は車を止めた。周りは既に色を失い、点々と家屋の明かりだけが、とうろつのように浮かんでいる。斯波は車の窓を開け、シートをゆっくりと倒す。

無音の空間の中、心の音が、次第に鮮明になって聞こえてくる。

ド      シ      ソド      ・ ・ ・      ソド      レツミファ      ミ      レ      、  
ドミ      ・ ・ ・

真つ暗の舞台の上で、辰悦のトランペットだけが、光を浴び、唥唥と響いている。

斯波はもう一度繰り返す。『ウィナーズ』の最初のトランペット・ソロを。

ド      シ      ソド      ・ ・ ・

すると、辰悦にだけ当たっていたスポットライトが、だんだんと大きく広がっていく。

ホルン。トロンボーン。オーボエ。フルート。そして、クラリネット。やがて、スポットライトはバンド全体を柔らかく照らし出す。その楽団の視線を集め、中央で指揮を振っているのは、斯波自身だった。

すごいな。

斯波は目を閉じながら、心の中で呟いた。

あいつのトランペット。あの音から、全ての楽器の音が生み出され、ある楽団の一つの音楽にまで発展していく。あいつのトランペットは、音が鳴ったその瞬間から、その曲の合奏の全体像を描いているんだ。

全体の音が想像できる。バンドの響きがひしひしと伝わってくる。あいつとなら・・・俺は叶えられるかもしれない。

あいつの音楽に俺が本気で挑めば、誰にも劣らないアンサンブルが引き出されるに違いない。

斯波の目に映っているのはもう、一人のトランペット奏者ではな



かった。ホールに響きわたる、勝者を讃える厳かなコラル。それを演奏する、一つの楽団だった。

でも、なんだろう。あいつのペットの音・・・快いの、どこか胸に引っかかる。

「ブーッブー！」

眼前の演奏会の情景が、あつという間に引き裂かれる。なんの愛嬌もないクラクション。驚いた斯波はハンドルに頭をぶつけた。

「おい、寝とんのか、アホンダラ！一本道に堂々と車止めンなよ！非常識やる！」

この後は洪水のような罵声が飛んできたが、斯波はその内容より、声色に注意深く耳を傾けていた。

威勢のいい、太い声。これは・・・

「おい、オッサン、目エ覚ませ！」開いた窓から太い腕が伸び、斯波の胸座をつかみ上げ、懐中電灯を斯波の顔に押し付けた。

しかし、斯波の顔を見たたん、腕の主はあつと声をあげ、急いで腕を放した。

斯波は彼の姿を見て、思わず笑った。

「オッサンは、お前も一緒だろ？兼壺。」

「・・・劉介か？」

月のない空に、小さな星が点々と現れる。

「何でこんなところ運転してたんだ？」

「知り合いの店に、ラーメンを届けて来てん。あ、俺、横丁商店街でラーメン屋やっとなるから。」

「ああ、星悦から聞いたよ。行こうと思ってたんだけど、それどころじゃなくて・・・」

ほい、と兼壺は車の中にあつた水のペットボトルを斯波に投げる。

こういう時はコーがよさげやけど、どうもカフェインはダメでよ、ちよつとでも飲むと眠れねえんだ、と苦笑いを浮かべる。

「それどころじゃないってえと、やっぱ　ブラバンか？」

斯波は肩をすくめながら、笑って頷いた。

「音大でもペットしか吹いてなくて、指揮なんて初めてなのに、今年の夏はコンクールで指揮を振らなきゃいけないなんて、ひどいよな？」

「でもスゴイで。顧問なんてそうそうなれるものじゃないもんな。コンクールの自由曲はもう決めてンのか？　・やっぱ、『祭り』かな？」

兼吉はマジマジと劉介を見る。斯波はペットボトルに口を当て。

「いや・今のレベルから言つと、まだあの大曲は無理だな。いいのか悪いのか、うちの部は三年生がいないから、来年もほぼ同じメンバーを組んでコンクールに出られるから、今年の夏は、とりあえず小手調べ、っていうことで、来年、イケそうなら、自由曲に選ぶ。」

「じゃあ・・・自由曲に選ばないってことも、あるんか？」

「かもな」

兼吉は黒い川に目をやり、弱い声で、劉介、と呟いた。

「なに」

「・・・いや、劉介、なんでここにおったんかなあ、と聞きとうなつて。」

「ああ・・・言われるとそうだ。家と正反対の方向へ、どうして車を走らせて来たのだろう。静かな場所なら、いくらでもあるはずなのに。」

「辰悦君、だっけ」

「え」

「星悦トコの子」

「ああ　辰悦や」

「さっき河川敷で吹いてた」

「へえ」

「音聞いたとたん、身震いがして。しばらく、車止めて聞いてた。」

「ハハ・・劉介もかよ」兼吉の白い歯が闇に映える。

「俺も、つて」

「いやさ、俺も前に星悦の店で吹いているの耳にしてさ。確かにビビるよな、あいつのペット。ペットのお前が言うんだ、実力はほんまもんなんやろな。」

「　　なんだか、面白くなってきた。俺」斯波は水を含み、星夜に流れる風を見上げた。

「あいつの音聞いてたら、まわりで演奏する仲間の音も聞こえてきたんだ。俺の耳の中で、何度も広がった。あいつの生み出した、完成された音楽が。あの音楽の響き、あの雰囲気、俺、他のやつらにも聞かせたい。俺があいつの音楽を引き出すことが出来れば、きつとすごいことが起こると思うんだ。」

「具体的には」

「・・・」

思わず兼吉を睨む。兼吉は小さく笑い、せせらぎに視線を戻した。

「俺、心配してたんだ。お前のこと」

「まさか」

兼吉の芝居じみた口調に斯波は笑ったが、兼吉の表情はやわらかなかった。

「俺な、お前が大人になって、綺麗な奥さん貰って、可愛い子供に囲まれて、幸せな結婚生活なんていうぬるま湯に浸っているうちに、辛酸を嘗めて誓ったあの約束を忘れてしまっんじゃないかって、心配やったんや。」

「兼・・・」

「もちろん、俺がお前が幸せになるのを妬んだ訳やあらへん。エエ大人になった今さらに、高校時代の約束覚えてるかかって聞くのも、

バカバカしい。よお分かつてる。でもな」

高校三年の夏、県新を最後に去った日がよみがえる。

上履きから譜面台から何まで、全てを鞆に押し込んで、誰の迎えもない朝。手には楽器ケースを提げていた。

劉介。

講堂のほうから声がする。振り返る。兼壺と、星悦。

兼壺は会うなり、いきなり頬を殴ってきた。

ケンイチ、何するんや。真っ青になる星悦の顔。

劉介。兼壺に睨まれる。

逃げたら、今度こそブン殴る。

もう殴ってんじゃないか。俺が頬を押さえながら笑って起き上がると、兼壺は急に顔を歪め、涙を流し始めた。

ちよちよっ、ケンイチ、大丈夫か？慌てる星悦の顔。

劉介。兼壺が水気の多い声で言う。

普門館、行けよ。俺達の代わりに、永岡先生を普門館へ連れて行け。俺は大人になったらもうパーコやらんかも知れん、やからお前が県新の吹奏楽部顧問になって戻ってきて、俺の子供らを、永岡先生編曲の『祭り』で、全国に連れていったってくれ。・・もし拒否したら、ブツ殺す。

あの時の仁王顔にも、年とともに優しい目じわが刻まれ、親友の兼壺は白髪 of 混じる働き盛りの男となって、今、斯波の前にいる。

「お前が音大に入って、卒業した後もプロ目指して頑張っているって知ったときは、まだ約束覚えとったんやって、嬉しかった。そやけど、川上さん　やない、玲子さんがいなくなっってから、連絡途絶えてしもって、俺、お前が氣イ狂って海でも飛び込んだんやないかて、心配やったんや。」

「大げさな」

「大げさやない。そやったら、教師として県新に戻ってきたとき、なんで真っ先に俺たちに会いに来んかった？俺、そーいうのメチャクチャ腹立つンや。ブン殴りたくなるくらい。」

「じゃあ殴れよ、今」

「ふざけんな。子供の先生、親が殴れっか」

「別に俺は、ふざけてなんか」

「劉介」

兼壺は斯波と目を合わせようとしない。ずっと川を見ている。

「絶対、普門館、行けよ。行かなんたら、今度こそ、ブツ殺す」

「・・・物騒な話だな」

「俺は本気だ。この二十云年間、ずっと待ってたんや。こんなチャンスつかんで、みすみす逃すヤツがあるか。そやから、先生」

さつと兼壺は斯波の方に向き直り。

「うちの息子、頼んます」

「斯波は何かを言おうとしたが、心にある塊は言葉となつて出てこなかった。

すると、いきなり兼壺は深々と下げていた顔を上げたので、石頭が斯波の顎に直撃した。

「ガアッ！」

「イテッ、と・・・ハハハ、すまんすまん。なあ、どやった、俺の演技。涙チヨチヨ切れの名俳優って感じやなかった」

兼壺の顔は嘘のように晴れやかだ。斯波は思わず顔をしかめて。

「・・・最悪だ」

「あれっ、そないに？」

「クサイ三流小説のアレよりも、もっと、いたたまれない、というか、痛々しい。」

「ひでえなあ。定期演奏会の劇では、一番人気を博した俺が・・・二人は思わず笑った。

「・・・ま、えっか。劉介」

「なんだ」

「時間、あっか」

「ああ。帰り道だったから」

「じゃあさ、ちょっと飲んでかねえ？俺、知り合いの店でうまいとこ知ってたんだ」

「ちよつと、おい」斯波の顔つきが豹変する。「アホ、飲酒運転させる気か？俺もお前も店の主人も、みーんな逮捕されるぞ。明日の朝刊の一面に載ったらどうする」

「ええやんか、一度俺新聞に載りたいと思ってたんや」

「無理無理、俺、トランクに火縄銃のレプリカあるから、なおさら無理。」

「大丈夫や。その店で泊まらせてもらえばええから。な？」  
「………全く」

よし、じゃあ俺について来い、兼壱はそう言つて車に乗り込む。

斯波は久々に、友人という神聖な温もりに浸かり、あたたかい溜息をついた。

## 第一章 宝島（2）

2

「てか、なんできょーぶかつあるうん？どよーびでしょお？」

天気予報では今日は真夏日の暑らしい。くずれかけた化粧の上から新たな化粧の層を塗ったくり、璃紗がピーピー口を尖らせる。

「他の部活はフツーに練習あるやる。ない方が不自然なんちゃうん？それより」

曜子は汗を手で拭いながら、苛立たしそくに返した。「あんたさあ、暑いつて分かってて何でワザワザ化粧する？そんなにケバいのが好きなのわけ？」

「ちいがあうーっ。これはあ、日焼け止めなんよ。けしようにひやけどめのくべつもつかへんのお？へっ、ばーかばーか！」

「こいつ・・・化粧も濃いけど、キャラも濃い。」

「突然変異かなんかじゃない？天然記念物にでも指定しとけば？」

未来の言葉に、カオルが思わずくりと笑う。

「ちよっとお、かおるちゃん、いまわらわんかったあ？」

「えっ、うつん、全然」

「こういうのには正直に言ったほうがええんやで、カオル。その方がこいつの為にもなるんやから。」曜子が諭す。

璃紗が顔を上げて。

「あ、リツちゃんや！」

「ほんまや、オリさんもおるさあ。」

「おっす、リツちゃん、オリさん。」

「こんにちはあ。」

「みなさんおそろいで。」

白く照り輝く講堂の前の広場に、六人は集まった。

「コードは？」カオルが尋ねる。

「ああ、白鳥さんは、斯波先生のところに行っていますわ。なんでも、頼まれた原譜のコピーを渡しに行くとかなんとかで・・・」

「コピー？てことは、やっと合奏始めるンや。よかったさあ。」未来は垂れ目に皺を寄せる。

「シバリューもようやくやる気を出してきたんかあ。な、よかったな、西園寺さん？」

「あほなこといわんというてよお。璃紗いそがしくなったらバイトこまるっていうたやるお？」反抗する璃紗の顔は泣きそうだ。

「あ、みんなおはよう。」

音楽棟の方から和音が現れた。

「あ、コードおはよう」

和音はオリさんの方を向いて言った。

「オリさん、元気はまだ来ない？」

「ええ・・・昼までには来るってえ、言っていましたけど。」

「昼までに部活は終わるんだけどなあ。」和音は溜め息をつく。

「えっ、どないしたん、浜岡が部活に来るン？」曜子が目を丸くする。

「うん・・・」

「野球部の方は、どうなるんさあ？」未来も続く。

「なんかもう、どうでもよくなつたみたい。」

「なんちゅー、えーかげんな。」璃紗が呆れて。

「やっぱ、あいつは続かんかったか。」曜子は肩をすくめる。

「あ、でも、今日は別の用事もあって、元気は来るらしいのよ。」

「なんなん？」

「なんか、ブラバンに入りたいっていう友達がいるから、その子を連れてみんなに紹介したいって。」

「げっ？ブラバンに入るん？こんな部活に？」



「ねえねえ、その子、女の子？それとも男の子さあ？」

「男の子よ。」

「イヤったあー！」未来は背中を大きく反り、拳を強く突き上げる。

「ええ？なあ、かずねちゃん、なんねんせいなん、そのこ？」

「ええと、二年生。だから同じ年。」

「元気先輩の話によると、その人は『マーキュリー』のご子息だそうですよ。」

律人が爽やかな口調で語る。

「え？じゃあ 鎚矢君？」と力オル。

「そんなヒト、おったかなあ？」

「ていうか、ジャズのおっさん、結婚してたっけ？奥さん」曜子が眉をひそめる。

「みたことない、みたことない」未来は大きく首を振る。

「それって、危ないんじゃないですかねえ。そのお・・・」

「不義の息子」

「いやあ、曜子ちゃん、昼ドラやないんやから。そんなドロドロしてんの」

「島田」未来の背後から低い声がした。思わず未来の顔色が変わる。

「ひゃっ、シバリユ、じゃなかった、斯波先生！」

斯波は重たい目をしていたが、怒ってはいないようだった。

「朝からギヤアギヤア騒ぐんじゃないぞ。まあ・朝と言っても、もう九時を大幅に過ぎてしまっているけれど。練習開始予定時間とつくに過ぎているから、早く中に入って。白鳥、譜面配ったか？」

「あ、いえ、まだです。」

「それじゃ早くみんなに配ってやってくれ。さ、早くみんなも楽器出して、準備しろよ。十時半に四四二ヘルツでチューニングした後、即、合奏始めるからな。」

「はーいつ」

斯波はニコリと笑い、また音楽棟の方へ消えた。

ふうう、と未来が胸をなでおろす。

「よかったさあ、シバリユーで・・・本気で怒られるかと思った。」

「シバリユーはガミガミ怒る先生やあらへんさかい」曜子が笑う。

「ていうか、十時半まであと一時間もありませんから、譜面全部さう時間もありませんよ。」

律人が途方に暮れた顔をする。

「大丈夫やって。打楽器なんて適当に叩いけば誰にも分からへん。」

「無理ですよ。かえって目立ちますって。」

「あの、コード、ごめん、譜面もらえるかな？」

「あつ、そうね、ちよつと待って。楽器庫に置き忘れてきちゃったの。」

「なんで謝るン、カオル？」

「なんとなく・・・」

「それじゃあ、みんなも早く楽器出して。先に来た子たちがもう合奏隊形作ってくれているから。」

「はい」

カオルたちは口をそろえて答え、靴箱のほうに向かった。

「大きいのが、一、二、三千円と、八百円のおつりです。毎度おおきに、また来てや！」

帰る客と入れ違いになって入ってきた男を見て、レジにいた兼吉は目を丸くした。

「およつ、星悦やないき！どないしたんや！」

「どないって、別に、ラーメン食いとうなっただけやて。みそ、食わしてもらおか。」

「毎度アリイ！」ダルマのような、大きくいかつい目で、兼吉は星悦を上から下まで見た。

「かれこれ一月も会わなんだ。ま、あつこに座ってゆっくり話でもしようや。あおい！」

「はい。」給仕をしていた女性が顔を上げた。

「ちよつとレジやつといてんか。んで至急みそラーメン特盛二つ、五番テーブルよろしく頼むわ！」

「ちよつと待てつて、僕特盛なんて頼んどらん。」

「俺のおごりじゃ。ありがたく食べ。」

「ええけど、父ちゃん、まさかまたサボる気やないやろね？」

図星を差されて、兼吉は赤くなり、

「ばッ、ばか言えッ、俺はナ、大事なお客さんが来てるから、ゆっくりそのお方とお話でもしたいんだヨ。サボる気なんて毛頭」

「あ、ジャスのおつちゃんこんにちは。」あおいは愛想よく会釈した。

するとすぐに厨房から、怒涛のような罵声が襲いかかってきた。

「あんたア、せいえつちゃんならお向かいやねんから、いつでも会えるやろ！人手たりんから早よこつち戻つて仕事しんかい！」

「うるせーなあ。俺は昼休み取つてねーんだぞ！」

「昼間しか営業してへんのに何で昼休みが要るんよ！ウダウダ言わんと、早よ戻リイ！」

ガランゴロンゴバツチャーン！厨房で何かが吹っ飛んだ。

頭上で繰り広げられる夫婦ゲンカに、店の中の客は、ラーメンを食べながら、なんとなくいたたまれない様子だった。

「奈美ちゃん、相変わらず、怖いな。」

星悦は兼吉にそつと囁いた。

「ほつとけ。あいつは俺に文句を言うのが趣味なんさ。」

兼吉は白い歯をニツと見せた。いたずらっ子のように、妙に可愛げがあった。

コイツも、昔と全然変わらないよな。

星悦は、温かい溜息をついた。

五番テーブルに座っていると、ほどなく給仕が盆に茶を載せて奥から出てきた。この人も兼壺の娘だ。

「はい、ジャズのおっちゃんの分。」

「お、藤子ちゃんか、サンキュッ。いやあ、また一層きれいになったなあ。ほんまに現代版藤壺って感じやな。」

星悦の言葉に兼壺の娘は齒がゆそうな笑みをこぼした。

「親友の娘見て鼻の下伸ばすな。・・んで、藤子、俺の茶はどうした？」

「知らんわ。」藤子はつんとして。「自分で淹れろって、女将さんがゆうてはりましたけど？」

彼女は涼しげな顔をして去っていく。

「おい、藤子！」兼壺は舌を打った。「・・・たく奈美子のヤツ、いい年して子供っぽいことをするもんだ。全く」

ことの元凶はお前じゃ？

気まずい雰囲気を感じ、星悦は慌てて言葉を茶と一緒に飲み込んだ。

「渋ッ！」

星悦は口に含んだ茶を全て口から噴射した。

「・・・おまえ、ちゃんと手エシイや。」

兼壺は太い眉を寄せて、顔をお手拭でぬぐった。

「ごめん、ごめん」

「いや、お前は俺の顔拭かんでいい。なんとなく気持ち悪い。」

「あ、そう。・・・でもな、兼壺、奈美ちゃん怒ってんでえ。僕のことはいえからさ、もう奥に戻った方がええよ。」

「ここは俺の店だ。俺の好きにして何が悪い。」

ムキになるとこめかみに青筋の浮き出る兼壺をみた星悦は、やれやれと寒い溜息をつき、壁にかかっている『中華亭 ごつつあんです』の品書きに目を移した。

しばしの沈黙のあと。

「はい、みそラーメンの特盛二人前でーす。父ちゃんちよつと、手、どけて。」

「・・・あ、おう・・・」

兼吉は急いで手を引つ込めた。星悦は給仕に顔を向けた。

「ああ、明子ちゃんも手伝うてんのか。大学はどうしたん？」

「今日は午前の授業が全部休講で、サークル行くにも時間があるから、少し暇つぶしに。」

「はあ、それで家業の手伝いか。感心やな。」

「おっちゃんも、食べに来てくれてありがとう。おおきに。」

次女の明子はやわらかな笑みをほほにうすらと浮かべた。

「・・・あ、父ちゃん。母ちゃんが、ジャズのおっちゃんとは長い付き合いやし、確かにしばらくゆつくりと二人で話すこともなかったやろから、今は好きにしなさいって。ただし、あとの皿洗いは全部ひとりでやることって言つとったで。」

「なに？」パツと兼吉の顔から青筋が消えた。

「そうかあ、あいつが折れたかあ。珍しいなあ、ハハ。よしよし・・・分かった。いくらでも洗つたるわあ、て言つとけ！」

「はい。」

星悦はしばらく、明子の後ろ姿をぼうつと眺めていた。

「明石の上や。光源氏が惚れるのも無理はないなあ。奈美ちゃん似やもんなあ。」

「お前さ、さつきからヒトの子にニヤニヤして見とれてるけどな、あいつら、絶対お前みたいな、油が切れてひからびた四十の男やめなんて、全く興味ないぞ。お前みてエなのの舅なんて絶対俺、なりたくないから。それから、あいつらは、俺似だ。」

「ただ賞賛しておるだけやんか。えらいヒドイ物言いやな。」

「うるせ。それとな、光源氏は、オレだ」

「ワケが分からん」

兼吉の前には、湯気立つラーメンがあった。味噌の香りが兼吉の目尻にしわを寄せる。

「・・・奈美子のヤツ、麺、うまくなつたなあ。俺の方が絶品やけど、これもなかなか。」

豪快に汁を飛ばしながらラーメンに食いつく兼壱には、すっかり笑みが戻っていた。星悦はほっと安堵の息をもらし、イスに体を預け、自分もうまいラーメンをすすった。

「そういえば、兼壱、リユーちゃんには会ったか？」  
「つるんと一本、いきおい良く吸い上げて。」

「おう。ちょうど昨日な、鳴浜の方で会ったんや。お前の言ってた通り、元氣そうやったで。そんで、改めて友情と約束の確認を取り交わした。ニヒ」

兼壱はニヤニヤしながら、レンジでコーンをすくう。

星悦はタイミングを見計らって、言った。

「兼壱、ひとつ言わせてもらうが、親同士の約束のために、子供の人生引つかきまわしたりすんなや。藤子ちゃんも、明子ちゃんも、あおいちゃんも、ほかにしたいことあったかもしれないのに。元氣もかわいそうやで。あいつが嬉しそうに硬球持って歩いてんの、僕、実は見たんや、この前」

ギロツとだるまの目が光る。

「なんやて？元氣が、また野球やってるんか、コソコソと！」

しまった。隠そうにも、もう遅い。

「ちやうちやう、ちやうって」

「じゃあなんや、チワワか？」

「そやない、体育の時間でな、あいつがソフトボールしているとこ見ただけや。勘違いすんな。あいつは、いつも放課後に、元氣にチユーバ吹いとる。」

・・・あぶない。うっかり、口が滑ってもうた。

「フーン・・・」兼壱は目を細くした。完全に見破られている。そのうち麺が太くなる。

「おっと、伸びてまう、食おう、食おう。」

食事を始めると、今までのことはすっかり忘れてしまう。

良かった。星悦は背中にへばりついた服をゆっくりひきはがした。

でもな、兼吉。

お前が、リユーヤんと約束守りたい気持ち、分かるで。あいつと一緒に普門館の舞台に立ちたかったお前の気持ちは、僕も持つてる。

でもな、そのために五人も子供生んで、数打ちや当たるやろうつて考えで、ボンボコ子供をみんな吹奏楽に放り込むのは、あかんで親のやることやない。

兼吉。元気はな、チューバやのうて、野球がしたいんや。お前も分かっとるくせに。いくら約束でも、リユーヤん、こんなこと、望んでなんかおらんよ。な、兼吉。

「そついやあ、玲子さんの話はしとつたか、リユーヤん？」

「え？あ、いや、なんも聞いとらんけど。」

星悦は思わず溜息をついた。

「玲子さん、あれつきり、なんかなあ。」

「あれつきり、ていうても、もう十年近くも前やろ」

「せや。」

「まあ　しゃあないつちやあ、しゃあないけど、でも劉介も、もう落ち着いたんやろ？せめて居場所さえ分かれば、連れ戻すこともできるのになあ。」

スープを飲み干し、アア、と兼吉は声を上げる。

「・・・あの時、やつぱり帰すんじゃないかなあ。ところでよ、おい」

「何や。ポンポン話飛びすぎやで。」

「あのな」真面目な顔を、突然近づけてくる。「・・・辰悦のことは？身元、分かっただんか？」

茶を飲んでいた星悦は、またむせた。まわりを、そつと一瞥する。

「いきなり、なんや。こんなトコで話さんでも、ええやろ？」

「お前がカワちゃんのこと話すから、俺も喋りとうなって。」

「メチャクチャな理由やな」

星悦の吐息がスープを揺らす。

「結果論から言うと、ハテナ、や」

「あんな、星悦」更に兼壺が身を乗り出す。「正直、ヤバイと思うで。家族に連絡もせんと、淀川のほとりで六歳の子拾うたまま、その子が高校生になるまで、何も身元を調べずに、自分の子として育てておる、って。ハタから見たら監禁やで？自宅監禁十一年。」

「オイ、僕はナ、なに不自由あらへんように育てておるわ。中学も高校も、行きたい所に行かせてる。もちろん、大学もそうするつもりや。それでなにが監禁やねん。」

「まあ安心しいや。俺、これでも法学部のハシクレやから、万一サツに二才われた時はうまく法律の抜け道見つけて、救い出したる」

「こんな時に法学部か」

「こんな時こそ法学部や。ほかにラーメン屋の店長が法律使うところあるか？」

「・・・兼壺、厨房戻れば？こんなヒマな話してるヒマあるんやったら」

「ヒマやないで。俺はナ、マジメに星悦のこと心配してるんや。なんか、正直言って、今、お前、いい息子に恵まれて、シアワセな生活真つ最中やろ？せやから、そろそろ、暗雲が立ち込めてくるよな・・・」

星悦は箸を置いた。

「コトダマ、って言うやろ？それにな、兼壺。前にも話したけど、僕が辰悦の身内を探さへんのは、辰悦の要望なんや。・・・凍てついた、冷たい子供の手のひらで握られて、オジちゃん、帰りたくないって・・・僕、辰悦の本名すら知らんのや。」

星悦の表情がだんだん陰っていく。兼壺は飲みかけたスープを口から離し、箸を置いた。

「あああ スープがマズくなってもうた。」立ち上がる。



「兼吉」

「すまね、俺、やっぱり厨房戻る。俺のオゴリだから、好きなだけそこにいてろ。」

「あ、いや　僕も、そろそろ店に戻らないと、休憩時間、終わりだし・・・」

「星悦」

「は」

「劉介のことも元気のこと、首突っ込んでエエ。お前には、もっと身近に、もっとせなあかんことがあるやろ」

「」

「そいじゃ」

兼吉のダルマの目はニコリと笑い、厨房にラーメンの空き皿を持つていった。

## 第一章 宝島（3）

3

シャラシャラシャラ・・・マラカスの軽快な刻みに、タンバリンやカウベルが飾りをつける。

トップシンバルを鳴らし、バスクラム軽やかに、ドラムセットが曲に加わる。

管楽器はゾロゾロと、楽器を構えて準備する。

さあ、いよいよ始まりだ。

アフタクトの五連符を合図に、真夏の物語が紡ぎ出される。

「あれ？」

外を歩いていた田岡は、音楽の聞こえる講堂の方を向いて立ち止まった。

スポーツウェアの大西も、音に招かれ、ラケット片手に外へ飛び出す。

「うわあ、懐かしい曲やわあ。ス波先生、ようやく合奏始めはったんですね。」

「ああ、大西先生。この曲、吹いたことあるんですか？」

「はい。出身校の定期演奏会に、OGとして出演した時に。」

「へえ、じゃあ僕と同じですね。」

「あれっ、田岡先生、まだ楽器続けてましたん？」

「四、五年は前のことですよ。なんか聞いたことあるなあと思って・・・確か、『宝島』ですよな？」

「ええ・・・あ、サックスのソロ始まった。あれっ、五組の戸田さんやるか？うまなっとなあ、あの子。」

「でも・・・」田岡は具合悪そうに顔をしかめる。

「なんですかこのトロさ。全然ノリあらへんと思いませんか？しかも

何から何までグッチャグチャの吹き放題、好きほうだい。メロディはハシッていて、伴奏はヒッパッていて、音程なんか皆無」  
「じゃあないですよ。久しぶりの合わせですし、この曲最初の合奏ですから。」

大西は講堂の方へ歩いていく。

「ちよちよつ、大西先生、どこ行きはるんですか？」

「ちよつとだけ見ていきます。田岡先生もどうですか？」

「ちよつとて先生、テニス部の練習はええんですか？」

「だいじょーぶ。ね、ちよつとですから。」

大西は子供のような笑みをこぼして言った。

一回目の盛り上がりが終わりに近づき、曲は二度目のサックス・ソロを迎える。

・・なんでまた、ウチなん？

曜子は隣に座る近藤晋作の横顔を、恨めしそうに眺めた。

近藤は譜面台を見つめたまま、微動だにしない。

実は、曜子はいまだ近藤の声を聞いたことがなかった。彼は常にウットウしそうな表情で顔を包み、他人が話しかけようとするのを無言で拒むのだった。

・・しゃアないナア・・

曜子は交替を求めるのを諦め、黒くなった譜面に目を移した。

でも、無理やで、これ。初見で吹くの。

当たって、碎ける。せやな、それでイコ。出だしが肝心……ん？

心なしか視線を感じる。

気の、精やる。新しい息を吹き込んで

「ストーップ！ストーップ！」

斯波の叫び声と、指揮台に打ち鳴らされる指揮棒の音。これで五回目だ。

「トダア！今、二小節遅れて入ったぞ、おい！俺が指示出してるか

ら、それ見ろって！」

「ハ・・ハイツ、スミユマセン！」

いつになく殺気のこもった目つきと口調に、さすがの曜子も怖気づいた。

斯波はバンド全体をギロリとねめまわした。

「全、然、ダメだなあ。リズム感もクソもない。お前らののはなあ、宝島やない　夢の島や！」

講堂が、しーん、と静まり返る。入口からこっそり顔を出していた大西と田岡の二人も、思わず顔を見合わせた。

とたんに、殺気は消え去る。

「あれ？」斯波は指揮棒で頭をつつきながら、羞恥の籠もった弁解の笑みを浮かべた。

「あれえー？今の分からなかった？駄洒落なのに。もしかして、夢の島って、知らない？東京にあるゴミの埋立地、なんだけど。あかんな、僕も今の子の笑いのツボが分からなくなってきたかも。ハハ・・・」

講堂に響くのは、斯波の笑い声だけである。

「・・まあ、とりあえず。最初の合奏の、初見でこれだけ吹けたら十分だろう。その上で、二、三注文を付けるとすると・・・ドラムの、横川！」

「は、はい」

「ハイハットとバスのドラの動きがぎこちない。それがテンポを後ろへ、後ろへ引っぱる原因になっているから、気をつけて」

「　　はい」

「それと、ボーン」

「はいっ」

「管、抜きスギじゃないか？音、半音下がって鳴ってるぞ。」

「あつ、すみませんっ」

「で、ホルン。特に、ファーストの、オダ！お前、そんな切ない音だすな。ホルンはもっと、おおらかで、まわりを包み込むような音

を出さないと。もしかして、吹くんじゃなくて、息、吸い込んでるんじゃないのか？なあ、オダ・オダ君？」

返事がない。

「あれ・君、オダ君じゃなかったの？」

「いええ、先生、実はあ、僕、『オダ』じゃなくて、『オリタ』なんです・」

オリさんはもじもじしながら。

「あ・それは、すまん。歴史のせいで、ついオダって思って・」

「

「いえ、こちらこそ、すみません。楽器も、名前も」

「名前は謝らなくても・」

斯波は何度も頭を下げるオリさんを見て、微笑を浮かべた。それで講堂の空気もやや浄化された。

「ところで、白鳥。」斯波はオーボエの方を向く。

「はい」落ち着いた和音の返事。

「ベースがいなきゃ、合奏が成り立たない。チューバは 浜岡は、何してる」

「それが・」和音はクラリネットの未来と顔を見合わせた。

「どうしたんだい」

「今日、新しく吹奏楽部に入りたいという生徒を連れてクラブに来ると行っていたんですが・」

斯波は後ろを振り返る。

「田岡先生、大西先生」

「げっ？」扉の裏に隠れていた二人は思わず顔を出す。

「そこに、浜岡来てませんか？」

「え・・・いえ・・・いませんが。」

「そうですか。ありがとうございます。」斯波は笑って返す。

田岡は愛想良く笑い返し、すぐに隠れ、眉をひそめて大西を見つめる。

「なあ 斯波先生、何で気づいたんやろ？」

「さ、さあ・・・合奏中、一度も後ろ振り向きませんでしたもんね。」  
「大西も不安そうに。」

「後ろにも目があるんとちゃうか？」  
「ですよねえ」

和音が、大西たちと反対側の扉を指差す。

「あ、先生、来ました。」

見れば、元気が忍び足で講堂に潜入しようとしていたところだった。

「浜岡！」斯波が叫ぶ。同時に元気が飛び上がる。

「ぐわっ」と、先生、遅れてすみませんでした！おい、こっちだ」

自分のもとへ来た元気を斯波は見下ろして。

「さっきの、ぐわっ、は何だ」

「あいえ、別に何もないです。遅れてすみません。あの、入部希望の人を連れてきました。」

「どの？」

「こちらです」

元気がそう言い、前に引き出した生徒を見て、カオルは思わず曜子と目を合わせた。

あれって・・・七色サックスの？

曜子が囁く。

かなあ。あ、でもちがう。ほら。

え？

手にほら、ペットの楽器ケース持ってる。

じゃあ・・・七色ラッパ？んでも、他人にしては似すぎてない？

そう、だよね・・・

「二年二組の鎗矢辰悦です。トランペット希望です。よろしく願います。」

字にすればそれだけの、何の変哲もない一言。しかし、音にすれ

ば、歯切れ良く、リズム良く、小気味良い言葉だった。

「木曜の授業以来だな。よろしく」斯波は晴れやかな笑みを浮かべる。

「よし、じゃあ、一旦合奏は中断だ。各自休憩を取ったあと、もう少し念入りに譜面をさらって来い。それで、そうだな、十二時半からもう一回合奏する」

普段土日の練習に慣れていない、少ない部員たちは、一瞬顔を歪める。

「うまくいけば今日は終わりだから、張り切って一時間やろうな。それとサックス」

「はいっ？」曜子は顔を上げる。

「二番目の長いソロ、そこ、吹かなくていい。戸田は一番目のをしつかり練習しとけ」

「はい」「曜子の表情は、まだ硬い。「でも、誰がやるんですか？」」

斯波は隣の男子に向かって。

「鎗矢」

「はい」

「サックスの譜面、読めるかい？」

「え・・あ、まあ、だいたいは。」

「じゃあ、やってくれ」

「え？」

「ソロ。」

「えっ？」この反応は曜子のものだ。そして曜子のものであり、カオルたちのものでもあった。

「それじゃ、解散。ちらばれー」

斯波が指揮棒をぐるぐる回す。部員は、三々五々、各自の譜面台を持って講堂のあちこちに向かって歩き出した。

「ああ 怖かった。」曜子はヨロヨロ、カオルの肩にすがりつく。

「シバリユーも、『俺』って言うんやね。」未来は気のない笑みを浮かべる。

「でも・・・本当に似てるよね。鎚矢君」とカオル。

「うん。生き写し。ていつても両方生きとるな。そう、瓜二つやで、七色サックス千林様と。」

「なんかさあ、ワケあり、って感じやね。ジャズのおっさんに聞こうかな？」

「それはやめといった方がいいんじゃない？」

「そうやで、未来。ワケを聞きたいのはむしろアイツ。おい、浜岡！」

曜子はチューバを取りに向かう元気の背中を呼び止める。

「ん？なに？」元気は振り向く。

「お前さあ、俺は本気だとかあんだけべらべら喋っというて、なんであつさりとブラバンに戻って来たん？」

「曜子、ケンカ腰に言わなくても」

「ああ。だつてさ」元気は寄ってくる曜子たちから、意識的に目を反らしつつ、力のない笑みを浮かべて言った。「辰悦、元水泳部だったし、スポーツもできるやろ？おまけにペットの腕はヤバイしさ。」

ふと、トランペットの爽やかな響きが頭上を通り過ぎる。カオルは見た。講堂の入口近くで、辰悦がロングトーンを始めていた。

曜子の眉はゆるまない。

「そ。んで、野球じゃ見返せないから、もう一回チューバに帰って来たってことか。」

元気がダルマの目でカツと睨む。

「見返せねえとか、そんなんじゃないよ！なんつか・・・」一瞬、元気はカオルの方に目をやった。「・・・とにかく、そんなんじゃないねえ」

「あのさあ、浜岡君」未来がニコツと笑いかける。

「ん？」顔をあげる。



「清流の千林君って、知ってる？」

「ちよちよつ、未来？」曜子とカオルは慌てる。

元気は眉をひそめて上を見上げたが、すぐに首を振った。

「なんで？」

「いや、その千林君って子な、わたしらと同学年なんやけど、鎬矢君とそっくりやねん。いや、そっくりというか、そのまんまやねん。」

曜子は腕を引っぱり、怖い顔で、未来っ、と息の声で怒鳴った。

「ふーん。」元気は真顔で言った。「俺、千林って奴の顔見たことねえけど、それ、多分偶然やで。遠い親戚とかかもしれねえし。俺は辰悦と小学校からの幼馴染やけど、そんな奴見たことねえし、辰悦がそんなこと言ったこともねえよ。」

東京弁と大阪弁が混ざった口調で、元気は軽く答えた。

「へえ、そう」

「幼馴染かあ」

「じゃあ、気のせいやね。気のせい。ほい、ありがと浜岡、もう行つていいぞ。」

「　　ったくなんやねん戸田、その口調は」

渋々言いながら元気は去って行った。

「　　それじゃ、ウチらも練習しようか」

「　　そうだね」カオルは答えた。

「　　なあ、カオル　　」

ふと曜子が顔を反らして。

「　　なに？」

「　　アイツ　　ほんまに吹ききってまうんやろうか？」

曜子の視線の先では、辰悦がソコの練習を始めていた。

大西と田岡は講堂を後にし、ロータリーのほうへ向かって歩いていた。講堂の隣の音楽棟の準備室では、貝原がコーヒーを飲んでいた。

「・・・どうでした、大西先生」

「何がですか？」

「斯波先生の指揮」

「ああ」「大西は柔らかく微笑んだ。「田岡先生は、どう思いましたか？」

「僕ですか？」田岡は少し空を見上げてから。

「いや、こんなこと言っちゃなんですけど、斯波先生、ワリと、サマになってましたね。」

「そうですね。私なんか、カッコええなあ、て思いまして」

「やっぱり、大西先生も？」

「はい。正直、私今まで斯波先生的こと、ハニワの土気がこびりついた同じ服を毎日来てはる、土臭くてカビ臭いオッサンぐらいにしか思っていないませんでしたから」

「正直すぎますよ、それ」

「でも 次の合奏で、あの子たちの音、きっと変わると思えますよ。斯波先生の指揮は、どんな音でも捕まえてやるぞっていう、ガッツというか、包容力がありましたからね。あの子たちも吹くことに余裕ができると思いますよ。」

テニスコートの前に来て、立ち止まる。田岡は大西の方を見て。

「大西先生。斯波先生が永岡先生の教え子だって、誰から聞きはったんですか？」

「貝原先生です。」

「貝原先生？」

「はい。」また大西は微笑む。「五組の古典が終わって教室出たとき、貝原先生が通りかかって、その時にいきなり、大西先生、あなた吹奏楽やっていらしたでしょう、四組の斯波先生はですね、永岡先生時代の県新ブラスのOBなんですよ、って。」

「ワケ分かりませんね、その展開。」

「永岡先生時代のブラバンっていうと、六組の浜岡君のご両親がそうじゃないですか。それで貝原先生に、じゃあ斯波先生は全国経験があるんですねって言ったら、貝原先生、急に黙ってしまっ」

「何も喋りはらなかったんですか？」

「はい。」

サアコイイ。カコン。テニスコートから音が聞こえる。

「そう言えば、確か一年ありましたよ。斯波先生は二歳年上ですから、あれは僕が高一の時ですわ。県新がコンクール出場停止になって、永岡先生が顧問を辞任して、青海高校に飛ばされたんですよ。」

「出場、停止ですか？どうして？」

田岡は額を押さえて、思い出すように答えた。

「確か、あの年部員の間で問題が起こって、新聞報道にまでなっ大変だったんですよ。その時斯波先生は高三でしたから、きっと。」

「はあ。そんなことが・・・」

二人は黙って、白い講堂を見上げた。

「ようし」 斯波は再び集まった楽団をゆっくり見渡し、大きく腕を広げて構えた。

「それじゃあ、パーカッションが終わって、みんなが入ってくるところのアウフタクト。つまり、ホルンとかの五連符のところから下さい。」

「ハイ」

指揮棒を指揮台に、カン、カン、カン、と打ちつける。

「テンポはこれくらい。だいたい一〇八ぐらいだ。僕が一、二、三、で空振りするから、四のタイミングでアウフタクト入って。いいかな？」

「ハイ」

「それじゃ」

一、二、

ハッ。息を吸う。

ビエロロロロ

一時間の練習の成果があつてか、だいぶ曲らしくなってきたように思える。ただ、まだ暗譜しきれていないため指揮者をずっと見ている者はおらず、そのためドンドン音が後ろへ、後ろへ、指揮が振られたやや後に音が届くような感じになっていく。

「トロンボーン！」自分の耳を斯波は指さす。

いや やっぱり音程は、見逃そう。

それより、完走することが第一目標だ。

オープニングが終わり、曜子がおずおずとソロを吹き始める。フルートのオブリガート。

「フルート、うるさい！飾りなんだぞ！」口元に人差し指を当てて。

「アルトのセカンド、ソロをかき消すな！引ッ込め！」

「で、お前は出るんだ、戸田！もつと息入れて！」

曜子は慌てて息を吹きいれる。

ダメ、吹き入れすぎ。それじゃチャルメラだぞ、おい。

「トランペット、一小節速い！」

怒鳴りすぎて、カオルが慌てて縮こまる。

シンコペーションは、金魚のフン状態。切れ目など何もない。

「雰囲気で吹くな！俺を見る！俺だけを見ろって！」

サビが始まる。心地よいファースト・トランペットのメロディに、

苦しみ悶える小動物のうめき声が混じりあう。

「ホルン！虐待されてるみたいな音出すな！」

バボツという爆音が、右の方から・・・

「チューバ！音もつと抑えて！」床に水平に向けた手のひらを、何度も下に押し付ける。

「クラリネット、もつと歌って！そう、いい感じいい感じ！」

「ドラム、モタつくな！」

「トランペット、ファーストしか聞こえないぞ。おい、古河、鎗矢！」

斯波は璃紗の方を見た。

西園寺。結構いい音だ。センスがある。とりあえず、音楽に関しては。

オーボエの白鳥のほうからも、快い響きが聞こえてくる。

玉石混交。でもいいさ。その方がやりがいがある。

全員上手い奏者ばかりで集めるなんて、つまらないじゃないか。

俺は完璧さを求める音楽よりも、楽しみを共有できる音楽がしたい。

だって、そうじゃないか。競う音楽がある以前から、楽しむための音楽があった。

でも　ちよっとヒドすぎないか？

リードミス。トーンミス。身の毛のよだつ不協和音。せつかくキレイに演奏している人があるのに、それにゴミをつける奴がいる。

「クラリネット、音程！ユーフォニウムも！バリトンサックス、ハシるな！」

はあ　なんか、疲れた。

指揮を振る斯波の姿が、どこかむなし。

最初のメロディーの再現。次は、アルトサックスの長く目立つソロ。奏者は

タラッタッタ

斯波は思わず指揮棒を止める。演奏は止まらない。

はつきり整った音の粒。音が発せられる度に、粒の中にあるものが弾けだすような、軽く、明るく、透き通った音。連符をもとめせず、三本だけのピストンで鮮やかに奏でる爽快な音楽。

斯波が指揮を振っていないのに気づいた部員達が、顔を見合わせながら、一人、また一人と楽器を下ろし、最後列のサード・トランペットを思わず見上げる。

辰悦は目を閉じながら、伴奏の消えた講堂に、ただ自分の音を存分に響かせていた。

斯波は、車の中で流れていたCDと、辰悦の音が重なったことを思い出す。

そうか。

こいつの音。なんか聞いたことあると思えば。

アイツの音と、同じじゃないか。いや、アイツよりも、もっとす

ごいかもしれない。

鎗矢、辰悦

お前、本当に、「鎗矢」辰悦か？

## 第一章 宝島（4）（前書き）

そろそろシバリューの青臭さにも慣れてくださったのではないでしょう（笑）。

シバリューというキャラは現在21歳（つまり、カオルたちと同じ年）の作者の未来の姿でもあり、今の作者自身と似た思考回路を持った人間でもあります。もちろん、カオルや辰悦、元氣、曜子といったキャラにも、作者の欠片が散りばめられています。ただ、作者はシバリューほどに熱い人間ではありませんが 汗汗

この小説のこの部分、実は三年前に書いたものなので、いろいろとつたない部分もありますがご容赦ください。現在、ようやく筆を起こし、第二章の途中を執筆中です。

## 第一章 宝島（４）

4

「ありがとうございました。」

ブレザー姿の学生が二人、『楽器店マーキュリー』を出て行く。演奏会の費用集めに来たようだ。星悦は商店街を歩いていく二人をニコニコしながら二階の店の窓から見送り、受け取った演奏会のチラシを店の掲示板に貼った。

「息子さん、遅いですね。」従業員の中村が、楽器を磨きながら星悦に声をかける。

「ああ、うん。今日から吹奏楽に入部するんですよ。」

「えっ？まだ入ってなかったんですか、辰悦君？あんなに上手いの。」

「うん、まあ。あいつ、引っ込み思案だからね。」

「辰悦君が入ったら、県新のブラバンも活気付くでしょうね。」

「だといいけどね。あいつ、本番に弱いところあるし。ほかにもほんまに、分からんことばかりで。」

「それ、分かります。私の娘も今年で五歳になるんですけど、親の私にも意味不明な行動をよくとって。」

星悦は黙って自分のデスクに座り、その上にある写真を静かに手に取った。

辰悦の、小学校の卒業式の写真。カメラを向けられ、無邪気に笑みをこぼす辰悦と元氣。

中村は話に熱中して、まだ一人で話し続けている。一方で、星悦は十年近く前の情景を思い出していた。  
名前は、なんていうんだい？



大人用の厚手の毛布で身をくるまれた幼い子は、なにも答えない。

それも、教えてくれないのか？

幼い子は、透き通った瞳を星悦に向けたまま、反らさない。

家族に知らされるのが、そんなにイヤか？

コクリ、とその子は頷き、小さい声で、おじさん、と呼んだ。  
ん？

その子は一瞬うつむいたが、すぐに星悦をまっすぐ見つめて言った。

ボク、おじさんの子どもになりたい。

紆余曲折があつたあと、結局、星悦はその子と約束をし、その子が辰年生まれだったので、辰悦という名前にし、自分の子として育てることに決めた。兼吉が機転を利かせてくれたおかげで、商店街の人から不審がられることはなかった。

あれ以来、星悦はその子との秘密を守り抜いてきた。家族は探さない、知らせない。それでよかったと思っていた。

でも、どうなんやろう。本当のところ。やっぱり僕って、マズイことしてるんやろか。

星悦は写真を見つめながら、長い溜息をついた。

「よし、じゃあ今日はここまで。みんな、お疲れ様ア。」

昼食休憩も取らないまま、結局合奏は二時前に終わった。斯波の発した解放令に、部員はフウと大きな息をつき、へたりこむ。

「それと、この曲、六月の文化祭でやるから、キツチリ練習しとけよ。明日は自主練にするかわり、来週の土曜にはまた合奏やるから、そのつもりで。」

『合奏』の言葉に、部員の顔が暗くなる。

すつくと和音が立ち上がり。

「今日は終礼ありません。自由に解散してください。」

言われなくても、みんな早々と楽器を片付け、帰り支度を始めている。

特に璃紗は必死だ。

「どーしよお。バイト遅れるわあ　　んじゃ、カオルちゃん、バイバイ」

「うん。バイバイ」

カオルも譜面台をたたみ、ツバを捨てて、立ち上がった。

「いい音だね」

不意に右側から声がした。いきなり言われてたのと、その内容に驚いて、思わず。

「え？どこが？」

辰悦は気さくな笑みを浮かべた。

「なんか、サビみたいなどころあるじゃんか。そのところ、すごく楽しくてのびのびした音だった。」

「え・・・でも私、ボーンとペットだけで吹くところ、音高すぎるから、吹きマネしてたんだけど・・・」

「無理に高い音出さなくていいと思うよ。低い音のいい響きが高音でも出せるように、ゆっくり練習していけばいいと思うし。」

「あ　　どうも、ありがとうございます。」

妙にくすぐったい。こんなことを言われた時は。

「　　鎚矢君、ソロ凄かったね。いつからペットやってるの？」

「小三の頃から」

「あ、だよな　　」　　「なんだかホツとした。」

辰悦は立ち上がる。

「がんばろうね。文化祭に、間に合うように。」

「そうだね。」

「それじゃあ」

「うん」

「カオル〜！」未来がこつちを向いている。

「みんなでさ、元気君のお店に食べに行かへん？元気君本人を連れていけば五割引だつてさあ！ね、曜子もさあ！」

「でも、未来。」和音が肩を叩く。「元気、もういないよ？」

和音はポツンと置かれた椅子を指差して。

「え！もう帰つたの？ハヤテ？」

「ううん、帰つてないと思うわ。多分」

「どこ？」

「ゴメンやけど、ウチ、今日はコンビニで済ませるから。」

曜子はサックスをストラップに吊り下げたまま、譜面台を持って立ち上がる。

「え？何で？まだ練習するん？」未来の瞳は白黒だ。

「うん。ちょっとソロやらんと、マズイっしょ。あ、コード、というわけで今日施錠ウチがやるから、先帰っておいて。」

「うん・・いいけど、明日自主練だけど、いいの？」

「うん。」

「曜子」カオルは親友に声をかけた。

曜子は振り向かない。ただ一点を見つめている。

「あんな、アツサリ吹かれて、たまるかよ。」

楽器を片付ける辰悦を、ずっと睨みつけている。

「うん」カオルはうなずく。

「絶対、上手くなってやる。」

「うん。」カオルはうなずいた。

夜。静かな横丁商店街に、一台の車が止まる。

『準備中 営業時間 午前十一時〜午後三時半 中華亭・

ごつつあんです』

・・夜、やってないのかよ。

斯波の肩から力が抜ける。

あの時、言ってくれたら良かったのに。

店の中は、黄色い光に満ちていた。恨めしそうに、しばしの間たずむ。

ふと、後ろを振り返る。向かいは星悦の店、『マーキュリー』。

こちらにも、まだ、二階の店に明かりがともっていた。

そして三回では、白い光りのもと、薄っすらとカーテンに映った影が揺れていた。

なにかを思い、しばしの間、明かりを見つめる。

一度踏み出しかけた足を引き戻し、斯波は車の中に入っていった。その車を見送る、一人の影。

「・・・先生？」

元氣の手には、硬球が堅く握られていた。

・

新天市の西隣、浅倉市である。

百坪を超えそうな邸宅の立ち並ぶ住宅街に、穏やかな朝が訪れた。

その中で、道に向かって横に広いガレージを構え、緑の垣根で周囲を覆った、一際目立つ豪邸があった。表札には「千林」とある。

整理された広いリビングの中央に置かれた長テーブルに皿を並べながら、藍は父の背に話しかけた。

「お母さんのいないバースデー・パーティーも、今年で十七回目やね。」

対面キッチンでコーヒーを入れていた父が振り向いた。鋭い目を  
して。

「いや、十一回目だ。」

脅迫するような父の目つきに、藍は思わず口籠った。

「あ・・・そうやわ。あたしももうボケてきたんかな。ハハハ・・・」

笑みはぎこちない。

裕也はグラスを両手に持ってテーブルに寄ってきた。

「よく眠れたか？」

「うん。ありがと。」

手渡されたグラスに、口を近づける。

「・・・ウーン。久しぶりにお父さんのアイスコーヒー飲んだけど、味は全然落ちてないわ。」

「何を抜かすか。」

裕也の目が和らぐ。

「 仕事の方は、順調なのか？」

父の言葉に、藍は思わず苦笑して。

「お父さん、これでもう三回目やで？うん、トラックの方は最近仕事も増えて、いろんな高校行けて結構楽しいで。やっぱ高校生は若々しいわ。みんな元気で、しばらくぶりに前搬出の依頼受けた学校の楽器運搬に行ったら、ちゃんと覚えていてくれて、なんやすごく嬉しい気分になったんよ。」

長女の藍は、去年の春、とあるトラックの運送屋に就職した。普段は学校給食を届けに小学校や中学校を訪れるが、演奏会の日やコンクールの際には、市の内外の高校にも出向いて楽器の運搬を引き受けている。

「やけど なんてそんなに仕事のこと聞きたがンの？」

「え そんなに聞いていたか？」 答えに戸惑って。「そりや・・・娘がうまくやっているかどうか心配するのは、親として当たり前のことだろ。」

そうではない。そんなことではない、自分が考えていることは。

あの時のことがまだ吹奏楽界で話題にのぼっていないか、明るみに出ていないか、ただそれが知りたいだけなのだ。

娘は何も察しない。

「またアそんなことを言う。はいはい、ご心配おかけして、誠に申し訳ございません。でもあたしももう独立して、結婚もしたンやから、いつまでも子ども扱いせんといってくれる？」

「そうは言ってもな・・・」

裕也は藍の顔を見つめた。表の庭が少しかげった。もの寂しげな裕也の瞳には、亡き妻の面影が映っていた。

「・・・あたし、聖斗呼んでくるわ。」

父の視線から顔を反らして、藍は立ち上がった。

裕也は表の庭に目をやり、ネガのように反転した妻の残像を追っていた。

「聖斗　っ、ごはんだよ。起きてる？」

「はい、今行くから。」

残像はぼやけ、やがて二つに分離する。

階段の方から音がして、息子がリビングに入ってきた。

「おはよう、父さん。」

剃って薄くなっているが、きりつとした原型をとどめた眉、高めの鼻、奥に何か光るものがある、大きく、鋭い瞳。

「おう。」裕也はそれだけ言い、あとは満足げに息子を心ゆくまで眺めていた。

聖斗は、裕也が指揮を振る清流学院吹奏楽部で、アルト・サクスを担当している。誰から学んだわけでもない、卓越した豊かな表現力と技術の高さは、彼が生来サクス奏者としての資質を備えた人物であるだけでなく、人一倍の努力家であることを物語っていた。来年のサクス・パトリリーダーにふさわしいということは、親の裕也だけでなく、部員も同じ考えであった。

テーブルの皿に藍が父の料理を盛りつける。やがて三人が席にくくと、藍が。

「ほなら、お父さんの四十三歳の誕生日を祝って・・・乾杯！」  
「乾杯」

カン、とグラスが軽く音を立てた。飲む間の、しばしの沈黙。

ああ、と聖斗は真っ先に声を漏らした。

「やっぱり、父さんのアイスコーヒーはおいしいですね。」

息子の褒め言葉に、父の口元が緩む。

「調子は、大丈夫そうだな。」

「はい。定期演奏会のあと、しばらく音の具合が良くなかったんですが、このところは低音もよく響きますし、調子もだいぶん戻ってきました。」

「そうか　ほかの奴はどうだ？」

「そうですね　滝井は最近一層音が鳴るようになってきましたし、橋本は指回しが速くなって、ビブラートのかけ方も上達しましたね。演奏会でソロが成功したので自信もついてきたみたいです。墨染は演奏会前からの不調をまだ引きずっていますが・あ、山寺は毎日休まず練習している甲斐あって、今伸びてきているところです。」

「山寺・・・あのヘタクソが？」

裕也は鼻で笑った。

中高一貫の私立で、学業でも部活動でも名門校である清流の吹奏楽部では、毎年、新入生の入部テストがある。ただ、去年は高校からの入学者の入部希望者があまりに少なかったため、仕方なく入部テストは廃止したのだった。その為、全国レベルの強豪校の部員の個人の技量に、バラつきが出来てしまったのだった。

山寺のトランペットは、今はまだしも入部当初は、とにかく、聞くに堪えない音だった。コンクールで地区落ちのレベルだろう。裕也は彼を入部させたことを心では後悔していたが、聖斗の言うところの、彼の熱心な練習態度を見て言い出すことができなくなり、今は彼がどこまで伸びるか見守ることに決めた。一度は他の楽器に変えようと試みたが、彼の前に立つとその意志は全て無に帰った。

山寺はいつもトランペットを手にしていた。そして誰とも接することなく、ただ一人で黙々と譜面台に向かっていった。一日中、校舎の裏で立ったまま。

そんなに好きなのかよ、トランペットが。

裕也は呆れに近い感心を彼に抱いていた。

ずっと下手でも続けるか？

絶対に追いつけない才能を見せ付けられても、その楽器が好きか？

俺なら、ヤだな。

藍は二人の会話をおかしそうに聞いていた。

「いやだ、二人とも親子なのに、その話し方じゃまるで先生と生徒みたいやね。」

「あ・・・」裕也と聖斗は顔を見合わせた。

「・・・そりゃあ仕方ないだろ。聖斗は部活で父さんと顔合わす方が多いんだから。」

「あ、そっか。清流って練習忙しいのに、何で聖斗家にいるんやろうと思えば、そうか、父さんと母さんの誕生日は部活休みなんやったね。忘れとったわ。ハハハ・・・」

「何を今さら」

インターホンが鳴る。

若い執事がノックをし、部屋のドアを開ける。

「旦那様、一色様がお見えです。」

「ちよつとすまん。」裕也はフォークを置き、席を立った。

一色の名に聖斗の瞳がゆらぎ、急いで父に尋ねた。

「父さん」

「ん」

「・・・もしかして、一色さん、海斗の居場所が分かったの？」

裕也は咳払いをし、服にこびりついた朝食の汚れを煩わしそうに払った。

「さあな。別の用件だろ。」

「もし海斗の話なら、すぐに俺に教えて下さい。お願いします。」

「分かった、分かった」

裕也は背中に次々と降りかかる聖斗の言葉を、急いでドアで遮った。



ボタン。

メイドがきれいに掃除しておいた接待用の和室に、一色の姿があった。

裕也は会釈もせず向かいに座り、唐突に話し始めた。

「それで、何か分かったのか？」

一色は鋭い目で裕也を見、黙って一片の紙切れを机に置いた。

「・・・東山のあるマンションの住所と、そこに住んでいた住人の名前だ。百万遍付近で浦島と思しき男を目撃したとの証言を頼りに調べたところ、この男が浮上してきた。」

鋭い眼は確信に満ちてギラリと光っていた。

裕也は紙に書かれた名と、渡された写真を見比べた。

吉田信二、三十六歳。清掃員。妻子は、無し。

年を重ねて老けてはいたが、間違いなく、ヤツの顔だった。

浦島英亀。あの、ヒデキ。

裕也は怪訝な顔を上げた。「住んで、いた？」

「ああ。二ヶ月前に部屋を出ている。管理人には、立川に引っ越すと告げたらしい。」

「立川？新天市の、立川か？隣町じゃないか。」

「・・・それが、部下に調べさせたところ、立川に住む十三軒の吉田のうち、あいつの家は一つもなかった。やはり、また名前を変えて住んでいるようだ。」

一色はチツと舌を打った。

「それがよ裕也、あいつの主な仕事場の一つに、警察署があるんだ。」

「・・・!!」

「だから嫌な予感がするんだよ、俺。あいつなら、やりかねないだろ？」

「・・・昔の事件を、調べるってことか？でもあの事件は、確か和歌山で」

「まあな。俺は警察のことはよく分からない。でも推理小説とかで

よ、他の県の警察が事件の捜査に加わることでよくあるじゃないか。備えあれば憂い無しだ。」

「よく分からないが・・・でも十四年も前の事件だ。そんな事件を多府県の警察動員して捜査できるほど、警察も暇じゃないだろう？」

「でもな裕也、まだ時効」

コン、コン。

「！」

「？」

襖を軽く叩く音は、二人の胸を激しく突き刺す。

「お茶をお持ちいたしました。」

青年の若々しい声がする。さーっと、裕也の体から、しびれがとれる。冷や汗をかいた。

「入れ。」

「失礼いたします。」

和室の襖をゆっくり開き、先ほどの執事が現れた。

黒い礼装のようなものを着、素手で盆に載せた茶を二人の前に置いた。一色は置き物のように身動きせず、彼が深々と礼をして部屋を出るまで、一度たりとも目を離さなかった。

一色、おもむろに口を開きて、いわく、

「すまん、口が滑った。」

「いや、大丈夫だろう。襖を叩く音とカブツだから。」

「今度の執事は　ちゃんと仕事、だけを、しているか？」

「ああ、高木はよく働いてくれる。料理も得意なんだ。」

声を低くして。

「・・・書斎には。」

「入れてない。」

「よし。」一色はゆっくり頷き、旨い茶を少し飲んで、すぐに口を離した。

「裕也、でもよ。執事なんて表向きはおとなしそうでも、裏では何

しているか分からないぞ。浦島のことでもよく学んだはずじゃないか。・・・亡くなった奥さんのためにも、もう執事なんか雇わない方がいいんじゃないか？」

「藍も結婚して家にはたまにしか来なくなつて、この広い家には俺と聖斗と高木の三人。俺も聖斗も料理が出来ないんだ、執事やメイドがいなけりやどうやって食つていけばいいんだよ？」

一色は眉間にしわを寄せながら、和室の高い天井を見上げた。

「こんなバカデカイ家を売り払えば、一生外食でもやっていけるだろうさ。それに、この家にいたままじゃあ、いつまでも昔のことに囚われることになるだろう？」

湯茶に波紋が浮かぶ。

「どうということだ」

「どうもこうも。ここには二人の奥さんとの思い出があるし、浦島の足跡も残っているし、それに、その、新聞記者のカメラだつてあるだろう？ だいたいカメラなんてそんな重要証拠、とっとと捨ててしまった方が　　すまん、また口が滑りやがった。」

「カメラは書斎のある所にしまっている。それに、フィルムはとっくに焼いた。」

茶の色が濁る。話題に飽きたのか、裕也は大きく息を吐き、顔を若干明るくして言った。

「ところで、海斗の方は何か調べてくれたか？ 聖斗のヤツがうるさいんだよ。」

「そりゃあ、双子の兄貴のことだ。弟が心配するのも当然だろ。気にもとめない親のほうがどうかしてるよ。」

「しょうもないこと言わずに、はやく言え。」

「ちよい待ち」一色はぐびりと茶を飲み干し、鞆から新たなファイルを取り出した。

「何でもでてくる鞆だな」

「まあな。ほいこれ、聖斗が沖田の息子から聞いた話を頼りにして、中学の水泳大会に出ていた、聖斗によく似た平泳ぎの選手の名前を

探した。すると　　いたいた、一人海斗らしき子が見つかったんだ。

「頼杖をつき外を見ながら聞いていた裕也は、思わず手を払い、顔を一色に向けた。」

「誰だ？」

「一色はファイルを見せ、一人の名前を指差して言った。」

「これが例の中学の水泳部の連絡網。で、これが海斗と思しき奴だ。」

「裕也は目を凝らしてよく見た。」

「・・・ 鎚矢、辰悦　　鎚矢ア？」

「ファイルから目を離し、どっと笑い出す。」

「鎚矢って、それじゃあまさか、あのトロンボーンの星悦の息子か？」

「多分。」

「いや、有り得ない、有り得ない。もし本当に海斗だとしても、あんな下手な奴に育てられたんじゃ、楽器吹かせてもダメだな、絶対・・・」

「顔色変えない一色に、裕也は思わず口ごもる。」

「・・・ すまん。言いすぎかな。」

「いや。なあ、裕也・・・」

「何だよ」

「ってことは、海斗にも楽器を吹かせるつもりなのか？」

「裕也は顔をしかめ、喉の中でうなった。」

「　　冗談だよ。本気で言うと思っていいんのか？」

「まあ。別に良いけど。それでな　　一色はファイルに目を移す。」

「この鎚矢って子、沖田の息子と鉢合わせになったその試合のあとで、すぐに部活を辞めたらしい。その水泳部の別の奴に彼のことを聞いても、誰もが知らないって一点張りだそうだ。だから、俺はますます海斗のような気がしてきてな・・・」

「  
」  
裕也は顔を曇らせたまま、晴れた庭の方を眺めたまま、何も言わない。

「・・・こいつ、聞いてんのか、俺の話？」

「とりあえず」一色は机に手をつき、ゆっくりと立ち上がった。

「浦島の件はそういうことだ。それから、もしかすると浦島みたいに姿をくらましたかもしれないが、一応ここにある鎗矢の電話番号にかけてみるよ。イヤなら、俺が代わりにかけるからさ。それでアボ取って、一度会ってみる。」

「  
」  
「ちょっと聖斗に会っていくよ。それじゃあな。」

「勝則」裕也の目が動く。

「お？」

「星悦に、聖斗を会わせるのか？」

「ああ。ありがたいことに、あいつは俺には敵意がないからな。」

「ふざけるな。あれはお前が」

「おアイコだろ。この話はしないって言ったぞ？」

「お前が言い出したんだろ」

「・・・そうだっけ？まあいい。俺の好きにさせるよ。んじゃな」

一色は部屋を出た。

裕也は溜め込んでいたものをすっかり吐き出し、静かにファイルを手を取った。

鎗矢、辰悦。

以前家に入ってた、あいつの楽器屋の開店セールのチラシにあった電話番号とおなじ。ということは、やっぱりあいつの子供か。それなら今も新天にいるはずだ。しかしそれならいつ、どこで海斗に会った？あの時、家内と子供ふたりは大阪にいたのに・・・。

再び、庭に影が差した。

一色は長い廊下の向こうにある、聖斗の部屋へ向かっていた。廊下には、黄色い音が染み込んでいる。

アルトサクスの、太く、明るく、響く音。

エキゾチックな旋律と、リズムカルな音符の群れで、廊下は浸されている。

軽く戸を叩き、中に入る。

音の世界が、たちまち消える。

「一色さん」

「『スペイン』か。お前が吹くとこの曲が二倍に良くなるな。」

「お世辞をありがとうございます。」聖斗は笑った。「この前定期演奏会が終わったところなのに、もう二カ月後のサマーコンサートに向けて練習しなくちゃいけない。でも、マーチングのグループは、今日も休みを返上して練習だから、それに比べたら、まだましかなあつて。」

「ハハ・裕也のヤツ、今年はコンクールないんだからもう少し休めばいいのにな。」

部屋には、有名なサクソ奏者のポスターや、ずらりと並べられた吹奏楽のCD、そして中等部のころからのコンクールのパネル写真があつた。

「三年連続全国に出場したら、翌年は否が応でも出場不可だなんて考えてみればひどいもんだよな。お前のサクスを東京の奴らにも聞かせてやりたいのに。」

「俺は来年があるからいいんです。可哀想なのは先輩たちですよ。」

「まあ、そうか。」

一色はベッドの縁に腰掛けて、ポスターを眺めながら、ぼつりと呟いた。

「海斗が楽器吹いてたら、何の楽器やっていたんだろうな？」

聖斗の方に向き直り、アイソ良く笑う。

「お前と顔がそっくりだから、やっぱりサックスかな？」

聖斗は首を軽く横に振った。

「海斗と俺は双子だけど、口元だけが違うんです。俺は母さん似で、海斗は      どちらかというと、父さん似だと思います。」

「それじゃあ、トランペットだな。いいなあ、兄弟そろって、吹奏楽の花形楽器だな。」

「でも、父さんが許さなかったでしょうね。」

聖斗はサックスをいじりながら、力なく笑った。

「・・・小さい頃、海斗が父さんの書斎に入ってトランペットで遊んでいたら、父さんがものすごい剣幕で取り上げて、海斗を思いつきり殴ったんです。海斗と俺は三歳の時からピアノをやりはじめたんですが、あの頃でもう海斗は上級の曲も弾けていたんです。だから音楽するなら俺より海斗のほうが向いているのに、ってその時は思ってた・・・」

一色は口を閉じ、黙って聖斗のほうを見た。

一色は、もともと笑った状態で出来上がった顔で、無意識的に口元が緩み齒を見せて、いつでもにこやかな様に見え、空気を柔らかくする雰囲気を持っていた。しかし、この時は、一色の口元からは笑みは消え、神妙な表情を顔に浮かべていた。

違うんだ、聖斗。

あいつはな、裕也はな、海斗がそうだったから海斗にしきりに手を上げたんだと思う。

俺の読みが当たっていたら、聖斗、お前も気の毒なものだぞ。

「一色さん」聖斗は一色を見た。何かを求めている眼だ。

「海斗に会いたいか？」

一色は直ちに聖斗の心を見通した。

「え・・・？」聖斗の瞳が揺れる。「一色さん、海斗に会ったの？」

「いや、会ってはいない。人違いかもしれないが、前沖田が言っていた水泳部の男子の居場所が分かったんだ。」

「きつとその人だよ！沖田は確かに俺にそっくりの男子を見たって言っていたから！」

聖斗の心が弾んでいるのが一目で分かる。

なんせ、海斗が行方不明になってから、もう十一年も経っているのだから。喜びもひとしおのはずだ。

「そうか、そうか。んじゃあ俺が、今海斗が世話になっているところに電話して、お前と会えるようにするよ。また今度電話するから、楽しみに待っておけ。」

「ありがとうございます、一色さん。」

聖斗の晴れやかな笑顔に、一色は十一年間ほとんど海斗の搜索に関心を寄せなかった、父・裕也のしかめ面を合わせていた。



## 第一樂章 宝島 (5) (前書き)

第一樂章最後の部分です。

もし「宝島」の音源がございましたら、それを聴きながら読んでくださるとうれしいです。

シバリューが勝手に脳内で妄想して作った青臭い詩も、聴きながら読んでくださると、少しは意味が分かるかも？しれません(笑)

それでは、また、第二樂章の「パクス・ロマーナ」で。

第一樂章 宝島（5）

6

一、二、

ハッ。

ブリルリル

ん？

気のせいか？いや、本当だ。

今日は、やけに音がいい。

なんかいいコトがあつたのかな。

怖いほど真剣な顔を自分に真つ直ぐ向ける戸田を見る。

なるほど やつと一生懸命になってきたのか。

でも、まだ本気じゃないだろう？

お前らのホントの能力は、こんなじゃないはずだ。

「ダメだ、ダメだ」

斯波が指揮棒をカンカンカンと鳴らす。

「てんでバラバラじゃないか。どうしたらそんなにズレて演奏できるんだ。」

斯波の言葉に、部員は黙ってうつむいてしまう。

「おそらく」 斯波は指揮棒を顎にさし、目は上を見上げている。  
「イメージの問題だな。全体的にはおおよそ譜読みも出来ているし、音も正しく鳴らせているんだけど、頭の中で考えていることがある意味でひどく個性的だから、こんなにまとまらないんだろう。よし、じゃあ今から俺が勝手に物語作るから、その情景を音に載せて吹け。」

「モノガタリ」

「ですか？」

「そうだ。いいか、よく聴いてな　ある所に、一人の子供がいた。その子はとてつもなくデッカイ夢を持っていた。そうだな、メジャーリーグでもノーベル賞受賞者でもなんでもいいんだけど、ここでは、ウィーンフィルの首席奏者としてもしておこう。子供の頃は無邪気だから、頑張れば絶対にプロの演奏家になれると信じていたんだ。でも、中学になり、夢見心地に吹奏楽部へ入部したとたん、ずば抜けた才能に出くわし、自分が途方もなくちつぱけなことを思い知らされ、その子はひどく傷つくんだ。プロの音楽家なんていう夢を持っていたことがバカらしくなり、自分からどんどん差をつけていく仲間に嫉妬を感じるようになる。もう、音楽なんてイヤだって投げ出してしまって、でも何年か経った時、胸の中からウズウズともう一回夢を追いかけたい、っていう思いがこみ上げてくるんだ。そしてその時、大人になったその子は悟るんだ。大きな夢は一生の宝物で、見つけてつかむことができるかは分らないけれど、迷ったり挫けたりしながらも、その宝を探し続けることが大事なんだ、ってさ。」

斯波の眼には、いつからか、音大で自分の力量に愕然とし、路頭に迷い悩んでいた頃の自分の姿が浮かんでいた。

「つまり、この曲の題名である『宝島』は、その子の夢が実現する楽園、という比喻で、宝である夢を求めて、尻込みせずに足を踏み出そう、という意味なんだ。　　っていうのはどう？」

部員はしんと静まり返ったまま。反応が返ってこない。斯波が苦笑する。

「・・・あ、やっぱダメかな？クサすぎる？」

すると、戸惑いながら、曜子が口を開く。

「いえ・・・先生って、なんだか・・・」

「詩人ですね。」未来が続ける。それで楽団にも笑顔が戻った。

「よし。やるか。」斯波の両手が広げられる。

「ハイツ」小気味いい返事が届いた。

斯波はパーカッションの方を向き、指揮棒を振り上げた。

マラカス、タンバリン、カウベルのサンバのビートが始まる。  
律人のドラムもノリがいい。

（さあ、行くぞ。）

斯波はプラスの方に眼をやる。全員と目が合う。サッ、と楽器が構えられる。

オープニングの五連符。

一、二、

ハッ。

トゥルルルル

夏空に輝く 偉大な入道雲

大海原にそよぐ 虹色しおかぜ

「そう！」満足げに斯波が叫ぶ。

宝島が目に見え始める。

サクスのメロディーが軽やかに、感情豊かに、描き出す。

白い太陽。青い波。緑の島。

曜子が立ち上がる。見せ所のソロがやってくる。

いまでも 夢に 見ている 無邪気に 夢中に 無謀に

叶わないと 決めつけて 捨てたはずの夢

「いいぞ、戸田！」

サビが始まる。

宝の島へ行こう 瑠璃色の海 広い空

心に描いた 地図を持ち 戸惑わずに 踏み出そう

夢は宝 つかもう 途方もない 空想でも

もし 途中で 道に迷ったら 戻ればいい

バンド全体が一体になっている。斯波は震えを感じていた。  
これだよ、これ。俺が長年味わいたいと思っていたもの。一体感。  
重厚な響き。

夏空を彩る 星のかけらたち

椰子の実のほほ 撫で 風は走り去る

六月の文化祭の本番。暑いライトに照らされ、楽団は宝の島に近づいていく。

さあ、この後が、あの連符のソロ。辰悦の出番である。

辰悦はゆつくりと立ち上がる。スポットライトが一点に集中する。

ソロの始まりだ。

傷ついた 幼い心

昇りきれぬ 壁に背を向け 生きてこうと

弱さかくし 強がってた

あの日は 忘れない

晴れ晴れとして流れるトランペットのせせらぎを聞きながら、斯波の脳裏によみがえる。

高校一年の時、自分の楽器を買いたいと永岡先生に申し出たときの、先生の言葉。

ボクは、君に無駄な買い物はさせたくない。

高校二年の時、裕也が風邪をひいてソロを吹くハメになり、必死になって演奏会に間に合わせようと練習を重ねていた日々。なんとか成功を収めた後日、指揮を振った副顧問が俺に語った、本番までに何度も先生が準備室で語ったという、痛恨の言葉。

なんであんなヘタクソにソロを任せるんや。すぐに辞めさせて。

だから俺は頑張った。本当に必死になって。それでも、いくらやってもまわりの奴に追いつけず、後輩の方が評価が良くて、俺はすぐにバテて吹けなくなつて、口の中何度も切つて、コンディションなんか最悪で・・・でも、頑張った。

高校三年の春、合奏中、当てられて吹いたとき、先生が口にした言葉。

シバ、上手くなったな。

それなのに・・・

コンクールメンバー選考審査のある朝。

講堂の物置にやつと見つけた俺の楽器は、鈍器で殴られ、その原形をとどめていなかった。

すぐに犯人は分かった。俺は登校してきたばかりの裕也を引つつかみ、兼壱と星悦に止められるまで殴り倒し続けていた。

選考審査、中止。保護者会、教育委員会、ありとあらゆる報道官。

コンクール出場は不可、永岡先生は責任を取り顧問を辞任、俺は高校を退学処分になった。なのに、俺の楽器のことは兼壱たち以外には誰にも明かされることなく、裕也たちは最後まで夏を奪われた哀れな被害者を演じていた。

高校の思い出は、絶対に、美化しない。

そう決めたのに。なぜだろう。二年の夏に吹いたこの曲に弾んだ心は、今でも覚えてる。

胸にトランペットを構え、辰悦が礼をすると、わあっと大きな拍手が帰ってきた。

一瞬、辰悦は指揮者の方を見た。斯波は満足げにうなずいた。パーカッション・アンサンブルの豪快な演奏の後、トランペットとトロンボーンが、ザツと立ち上がる。

ユニゾンで魅せるハーモニー。高音だから、古河なんか赤い顔してるのに全然音が飛んでこない。つい数十年前の俺みたいだな、お前。隣で涼しげに吹く西園寺。あれは、負けず嫌いの奈美子だ。

コイツらだけには、何が何でも味合わせたくない。頑張つて、頑張つても、ダメなことがある。そんなの、高校生にはあまりに残酷すぎる。

コイツらだけには、何が何でも味合わせてやるさ。  
頑張つて、頑張つても、ダメなものなんて何もないんだって。

フェルマータで、再びサビへ。

それでも 探そう 見果てぬ dream 見飽きぬ treasure  
re

限界は 思っているよりは はるか遠くにあるから  
笑われてもいいサ 目指すのは ボクだから  
努力すること 強くなること さあ

コーダへ飛ぶ。いよいよフィナーレだ。

行こう 夢 きっと かなうから  
ツダツダ！

低音のシンコペーションを腕でつかみ取り、斯波は指揮棒を下ろした。

間髪をいれず、拍手に楽団は迎えられた。

斯波はバンド全員を立たせ、聴衆に向かって礼をした。  
長く続く拍手。アンコールを促す声。

斯波は後ろを振り返り、歓声を受ける奏者たちの顔を見た。みんな、思わずこぼれる笑顔を、斯波に送り返した。

これならイケる。ゼツタイ、いける。

斯波の心に何度も、何度も、その台詞は反響した。

電話が鳴っている。

「はい、はい！」

トイレのドアを押し開けて、星悦は受話器へ走る。

「なんで中ちゃんおらへんのやる　はい、お待たせいたしました、楽器店『マーキュリー』責任者の鎬矢と申します。」

「・・・」

電話の相手は笑っていた。

「もしもし？」

「久しぶりやな、星悦。俺のこと覚えてるか？」

「おれ・・・？」

眉を潜めた星悦に、過去の音声がよみがえる。

「　ああ！久しぶりやなあ！」

（第一章　終）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4590o/>

---

栄光をたたえて TEP × MURT

2010年10月23日03時49分発行